

[資料紹介]

速水御舟日記（1933年）

鶴見香織

前号に引き続き、速水御舟（本名：栄一、1984-1935）が残した日記を翻刻して紹介する。今号で紹介するのは前号の1932（昭和7）年に続く1933年の1年分である。この年、御舟は39歳の誕生日を迎えた。

1933年の日記は第一書房（東京）の手帖日記二冊に記されている。1冊目は1月1日から5月1日までの分が巻頭から順に記され、空白を空けて巻末から逆順に12月22日から12月31日までの分が記される。2冊目は5月3日から12月21日までの分が巻末まで順に記される。合わせると5月2日の1日分だけを除いて1年分となる。ここでは読みやすさを優先して日付順に並べて紹介する。

さて、前号で触れたように、かつて日記を調査した山崎妙子は、日記の原本をもとに、御舟の次女である吉田和子が書き起こした資料があったと報告している¹⁾。前号の翻刻時にはその資料は発見されていなかったが、今年度、和子ではなく義兄の吉田幸三郎が日記を書き起こした資料が追加で搬入された。それはスケッチブックと200字の柀目がある原稿用紙のノートに分かれ、前者は粗い書き起こし、後者は清書となっている。これらは日記と照合すると誤字や脱字があるものの、今回の翻刻でとくに固有名詞の読み解きにたいへん参考となったことを報告しておく。

以下、日記に記される御舟の行動について簡潔にまとめておく。この年、御舟は朝鮮美術展の鑑審査のため渡韓した。朝鮮行きは打診があったのは4月1日のことで、横山大観の推薦であったようだ。翌日には吉田幸三郎とともに大観を訪ね、この仕事を引き受けている。御舟はもともと朝鮮美術に関心を寄せていた。事後に美術雑誌『美之國』に寄せた文章のなかで「朝鮮には是非一度行つて見たいと思ひながらその機会を得ないで残念に思つていたところ、今年帝展の松岡映丘氏と共に朝鮮美術展覧会よりの招待を受け、はからずも年来の希望を達することが出来た」²⁾と語っている。

朝鮮行きを前に、御舟は同行する東京美術学校の教授で工芸史を専門とする田邊孝次と打ち合わせ（4月12日）、福井氏（4月22日）、次いで東京美術学校で講師を務め朝鮮総督府宝物古墳名勝天然記念物保存会委員でもあった小場恒吉（4月28

日、5月1日）を訪ねて、現地で見るとべき古跡について話を聞いている。出発は5月3日。京城での朝鮮美術展覧会の鑑審査は、松岡映丘、満谷国四郎、有島生馬と一緒に、5月6日から9日にかけて行われた。6日には土田麦僊が取材旅行に訪れ宴席をともにしている。その間も博物館関係者の案内で積極的に各種博物館や史跡を見てまわり、13日以降は平壤、江西、開城、扶余、慶州、仏国寺をめぐる。そして30日に朝鮮を出国、翌日下関港に着き、急行に乗って東京に着いたのは6月1日である。

この日記で興味をそそられるのは、御舟が訪ね歩いた史跡の様子や、博物館の所蔵品について詳しく記されていることである。また、現地在住の博物館関係者や一般人の名前が次々と出てきて、各種晩餐会で顔を合わせ、御舟の見学や旅行に尽力し、ときには自身で所蔵する発掘品を御舟に見せたり進呈したりしている様子が記されているのも興味深い。慶州から近郊の仏国寺へ御舟に同行し、石窟庵を案内したのは、朝鮮総督府古蹟調査事務嘱託時代の有光教一と、朝鮮総督府博物館慶州分館に席をおいていた崔順鳳だが、どちらもその後、戦後の朝鮮考古学を担うことになる人物である。なお、御舟の朝鮮での様子については、土田麦僊³⁾、田邊孝次⁴⁾、加藤松林⁵⁾に回顧談がある。

また、この年、御舟は長年の親友であった小茂田青樹と永別した。昨年に引き続き御舟は青樹の病状を気にかけて、青樹が療養のため仮寓していた逗子に見舞う（4月11日、7月17日）ことも欠かさなかったが、危急の報にかけつけた翌日の8月28日に青樹は帰らぬ人となった。日記からは、以降、吉田幸三郎と御舟が中心となって、告別式、保険金支払いの手続き、遺族のため日本美術院同人たちへの寄付金、寄付作品の依頼、遺作の整理、写真撮影、画集の編集、遺作展の準備等を着実にこなしていったことが判る。画集の刊行では、仲間内で作品を供出し資金に充てた様子もうかがえる（10月17日）。御舟らが尽力した遺作展は翌1934年3月1日から7日まで谷中の日本美術院を会場に開催され、その出品作を掲載した『青樹画集』は吉田幸三郎が編者、七條憲三を刊行人として、遺作展に先立ち2月に完成することとなる。御舟はこの画集の題箋を

12月3日に書いて幸三郎に渡している。

ところで、御舟が「例の学校のこと」（4月25日）でたびたび太田耕治の訪問を受けているのは、おそらく病に倒れた青樹の代わりに帝国美術学校教授になってほしいという相談であったと推測される。御舟は断り続けていたようだが、青樹が死没したことで話は急展開し、10月11日には郷倉千靱の訪問を受け、同氏就任の報告を受けている。

御舟がこの年の再興院展に出品したのは《青丘婦女抄(童妓・蛭蝸・織女・砧搗・春苦艸)》であった。朝鮮旅行での取材であり、本人は「私は近来、足利時代の職人づくしの様に今の吾々日本人の生活を描いて見やうと思つてゐましたが、丁度朝鮮へ行つたのを機会に、風俗などの興味にもひかれてあれを描いて見ました」⁶⁾とコメントしている。日記によれば、6月25日に小下図に取り組みはじめ、8月31日に完成するまでの間、「童妓」は4回、「織女」は1回の改作があったことが判る。最後まで手こずった「童妓」の仕上げをしていたときに、御舟は青樹の訃報を聞くこととなった。

さて、相変わらず小林古径との仲は親密であり、古径との会話から強く刺激を受けている様子がうかがえる。「本格的基礎のなきものは危い 明確なる線の重要 経験をつむに従ひ亦深さを加えるにつれて？にな[ら]ざるを得ない」（3月31日）、「原石と宝石との例を引めて芸術画作道程の話は的確なるものであり意義深い」（9月13日）、「画談に時を移す 本格的の仕事にたつさわもの少なきをかこつ」（12月7日）などと日記に書きつけている。また、古径の新築の家屋を訪ねた際には「下図画稿 推古の薬師寺三尊の大作を拝見しゆるぎのしない立派な正道をふまられるゝこと感に不堪 学ぶ可きかなノヽ」（10月25日）とある。

古径の他には安井曾太郎にリアリズムの観点から注目していた様子もうかがえる。高橋周桑と安井について話し「リアリズムニ就テ安井氏ノ明確ナル辞ヲ賞ス 氏ハ日フ 自動車ガ走ル道ヲ描クナレバソレハ真実ニ自動車ガ走り得ラルヽ路デアラネバナラナイ 併シ徒ラニ定規ヲ用ヒテ自然ヲ写シトルノデハナイ ソレナレバ写真ノ方ガムシロ勝ル 絵画館カラ出テ自然ノ事物ニ接スルト活々シテキテ壁面ニ懸ゲラレタルモノハ殆ンド偽リノモノヽ様ニ思ハレル」（1月3日）と記して以降、ことあるごとに門下生とリアリズムの意味について議論したようだ（1月5日、2月5日）。その折に出ていた「生活線上」の言葉は、前年に御舟が再興美術院展評で若手画家に対し述べていた「生活に対する深い認識と観照」「生活の痛切な叫び」⁷⁾に通じるものであろう。安井に関しては、9月29日に二科展を見た際にも「安井氏の作品抜けてあるし生きてるんだといふことが観者を動かす 奥入瀬の水は潺々と音を立

てゝゐる 他の作品はそれを観ては唾者の感を覚へさせられる」と記している。ちなみに安井がこの年の二科展に出品した作品は《奥入瀬の溪流》（東京国立近代美術館蔵）である。

また、昨年から引き続き、原三溪からの茶会の誘いも頻繁で、この年は、1月7日から9日（伊豆長岡南風荘）、10月9日から10日（箱根強羅白雲洞）、10月17日から18日（箱根強羅白雲洞）、11月17日（横浜三溪山蓮華院）の4回を数え、12月25日には古径に同伴して三溪山に所蔵品を見せてもらいに出かけている。その度ごとに拝見した古美術品がこと細かに記されており、茶会の様子や三溪の持論がうかがえて貴重である。

前号と同様、本稿をとおして御舟に関心を持つ多くの研究者の方々にこの日記の翻刻が活用されることを願っている。

註

- 1) 倉本妙子『速水御舟の芸術』（日本経済新聞社、1992年5月）p.273、倉本妙子『「花の傍」をめぐって』『速水御舟(二) 写生・下絵』（学習研究社、1992年6月）註2、p.105
- 2) 速水御舟「慶州石窟庵を見るの記」『美之國』9巻7号（1933年8月）p.32
- 3) 土田麦僊「朝鮮回顧」『美術評論』4巻3号（1935年4月）pp.38-40
- 4) 田邊孝次「朝鮮に於ける御舟君」『美之國』11巻5号（1935年5月）pp.68-69
- 5) 加藤松林「速水先生の写生」『速水御舟(一)』（学習研究社、1992年6月）pp.175-177
- 6) 速水御舟「私の出品作・院展」『美術新論』8巻10号（1933年10月）p.37
- 7) 速水御舟「院展の入選画」『美術新論』7巻10号（1932年10月）p.35

速水御舟日記(1933年)

凡例

- ・翻刻掲載にあたり、漢字は原則として新字とし、かなづかいには原文のとおりとした。誤字脱字はママとしたが、一部 []内に補った箇所もある。
- ・読みやすさを優先し、原文の改行は反映していない。
- ・句読点がある箇所はそのまま入れた。句読点がない部分で文章が切れる場合は一画空きとし、名詞が連続する部分は読みやすくするため適宜一画空きとした。
- ・判読できない箇所は■で示した。
- ・寄託者より伏字の指示があった箇所は□で示した。
- ・人名等で特定できるものを註で示した。速水御舟資料に含まれる書簡の差出人名や内容から推定できたものも加えている。小茂田青樹の関係者については、「青樹日記(抄)」「小茂田青樹展」図録、川越市立美術館、2022年10月)を参照した。原則として初出時に註を付け、途中適宜人名のみ示した箇所がある。

一月一日

美シイ螺鈿ノ星ヲ鏤バメタル暁 初詣ノまひだま 高髷島田ノ花簪キラキラ 初春ノ歡喜ヲ表徴スル 烏山、東北寺墓参例ニ倣フ 東北寺松樹間ニ初光ヲ拝ス 嗚呼余モ早不惑ニ達セシカ ソノ序幕ハ切ッテ落サレタノデアル

訪客

小山¹、富取²、黒田³、石本⁴、天明⁵、牛田君⁶等

一月二日

横浜ニ中村、原両家年賀参伺 病後トハイヘ不相変親シミアル中村サン⁷ノ風格ニ拝接 三溪先生⁸ト十和田行清遊の話ヲ聞ク 原家ノ内 玄関ニテハ獅子舞神楽ガ初春ラシイ 三溪先生ハ伊豆ニ善一郎サン⁹ハ紀州ニ御旅行デアラルト桃井サンハ曰ハルト 一炊庵ニ村田サンヲ訪ツネ徳治サン¹⁰ニ会ウノモシバラク振りデアル 風邪引籠ラルト由ナレバ新井宿ニ小林サン¹¹ヲ見舞フ 最早イトト曰ハルトガ大分カゼ声ダ田中親美¹²サンニ依ッテ編レタル益田¹³團¹⁴両家秘蔵ノ宗達筆伊セノ帖ヲ観ル 素晴シイモノデ作中屈指ノモノデハアルマイカ 優麗雅稚ノ趣キ尽キザルモノデアル 美術院ニテ落子会ヒテ松本先生¹⁵宅年賀参上ノ約ヲ小山兄等シタノダガ横浜デ少シ足ヲ用ヒ過ギタノデ電話ニテ断ル 夜ハ一家ノモノデ加留多遊ビニ二日モ平和にアル 訪客 半田鶴一君¹⁶ 大沢市太郎 横田仙草君¹⁷ (不在中) 葵屋主人¹⁸ 高橋夫妻¹⁹

一月三日

鴨写生 死鳥デアルノデ羽根ノ組織ヲ検ルニ過ギナイ 高橋君ト、リアリズムニ就テ安井氏²⁰ノ明確ナル辞ヲ賞ス 氏ハ曰フ 自動車ガ走ル道ヲ描クナレバソレハ真実ニ自動車ガ走り得ラルト路デアラネバナラナイ 併シ徒ラニ定規ヲ用ヒテ自然ヲ写シトルノデハナイ ソレナレバ写真ノ方ガムシロ勝ル 絵画館カラ出テ自然ノ事物ニ接スルト活々シテキテ壁面ニ懸ゲラレタルモノハ殆ンド偽リノモノト様ニ思ハレル 松島画舫²¹主来ル 画商トシテ位置ハ作家ト同等デアル可キハツトイフ話ヲシタングダ 夜近ク笹岡正民君²²来訪 宗達

- 1 小山大月(1891-1946)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1926年日本美術院同人。
- 2 富取風堂(1892-1983)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1924年日本美術院同人。
- 3 黒田古郷(1893-1967)東京出身。安雅堂画塾以来の仲間。1921年日本美術院院友。
- 4 石本光太郎(1890-?)東京出身。小林古径に師事。1929年日本美術院院友。
- 5 天明愛吉(1885-1949)東京出身の俳優、執筆家。
- 6 牛田雞村(1890-1976)横浜出身。安雅堂画塾以来の仲間。1914年日本美術院院友。
- 7 中村房次郎(1870-1944)横浜の実業家。
- 8 原富太郎(1868-1939)原三溪。横浜の実業家。
- 9 原善一郎(1892-1937)原富太郎の長男で実業家。
- 10 村田徳治 原家で執事を務めた。
- 11 小林古径(1883-1957)新潟県高田出身。1914年日本美術院同人。
- 12 田中親美(1875-1975)古筆、絵巻研究家、鑑定家。模写でも知られた。
- 13 益田孝(1848-1938)益田鈍翁。実業家。茶人。優れた収集品で知られた。
- 14 團琢磨(1858-1932)実業家。三井財閥総帥。男爵。優れた収集品で知られた。
- 15 松本楓湖(1840-1923)日本画家。安雅堂画塾の師。
- 16 半田鶴一(1898-1979)博多出身。国画創作協会解散後、小茂田青樹に師事。1932年日本美術院院友。
- 17 横田仙草(1895-1962)東京出身。小林古径、御舟に師事。1933年日本美術院院友。
- 18 蒔田實 実兄。
- 19 高橋周桑(1900-1964)愛媛県出身。御舟に師事。1930年日本美術院院友。妻志ま子は郷倉千鞠の門下。
- 20 安井曾太郎(1888-1955)洋画家。

扇面流し複製二用ヒタル台紙ダトイフ小形ノ紙五枚拝受スル
丁度来合セタ若山²³上田²⁴両君ヲ交工晚餐 話題ハワッケル²⁵
ノゴッホ偽作問題 飛弾[騷]旅行回想談 天明サンモ参加
談ハハズム 若山君ニハ久シ振りデモアルノデ大分話し続イ
テ芸術論ニ入り込デテ了ッタ 輪郭ハ内容ノ積マレタル事ニ
依リテ必然的ニナサレルモノデアル セザンヌ、ゴッホヲ観
ルト了解スル 現今ハ形式主義ニテ輪郭ガ先キニタチ過ギル
トオモウ コンナ話デ十一時ヲ過グ

訪客 松本真蔵君²⁶トソノ子供 池田兵三郎氏 笹岡正民君
若山 上田君等 高橋夫妻帰居

一月四日

年賀状ノ御返事ニテ殆日ヲ終ル 金子丈平君²⁷胎紅ヲ病ラウ
トカ 夕刻見舞ス タイシタ事モナササウデアル 弥²⁸ハ歌
舞伎ニ出掛タノデ留宅ノ子供達ニセガマレテシネマ映写 相
変ラズノモノデアルガ子供達ニハヤッパリ面白イラシイ 笹
本サンガ正五郎君²⁹ノ事ニテ来ル 何デモ皆デ芝居ヘ出掛ケ
タノガ気ニ入ラヌトカデ 併シ最早下火デアルソーダガドウ
モ困リモノデアル

一月五日

午前中ハ賀状ノ整理ニ費ヤシテ了フ 新年初会研究会ヲ午後
催会 若山 仲³⁰両君加入、小林³¹、川面³²両氏来訪 七日三
溪先生ノ御招キニテ長岡行の打合せデアル 夕刻大森サン³³
モ来ラレタリ デッサンハ遂ニ為スコトヲ得ナクツケレド
モ座談会ノ方ハリアリズムノ事生活線上ニ密接ナル関係ヲモ
ツトコロニ芸術ノ重要トカ カナリ内容アル談ニ意義アル初
会デアッタ

訪客 小林古径氏 川面義雄氏 大森蕃樹氏 桜井昌氏

一月六日

冷雨暗迷 玄難ノ下図ヲ練ル事終日 松坂屋展観十四日ニ決
定セルニ付テ森³⁴氏ソノ督促ニ来ル 酒々井ノ客人ノ土産ノ
川蟹ノ風味ハ忘レ得ヌモノガアル 印旛沼ノ木造蟹ノダ
ソーダ

森太郎氏

一月七日

原三溪先生ノ御招キヲ受ケ小林、川面、縣³⁵三氏ノ同行ヲ得
豆州長岡神戸南風荘ノ柴扉ヲタゞク 東京駅発午前八時廿五
分 国府津ニ后発ノ急行ニ列車ノ後ヲ追ヒ仕極ノンドリト四
雅客ヲ運ブ 沼津下車 桃郷静浦江ノ浦ノ風光自働車ノ車窓
ヲカスメル 漁村ノ午陽ニ浴スルハ寔ニ感覺的ダ 原色ガ反
発シテ輝キテイル 伊豆石ノ重畳タル南画ヲ想起スル 切通
シヲ抜ケテ眼界ハ田園ニ開ケル 田畑、林丘 街道皆ガ皆午
陽ノ光ヲ吸収シテキル 漁村ガアートペーパーノ洗ニ例ベラ
ルゝバ此ニハ和紙ノ生紙ノ味デアル 南風荘ノ所在ハ村家裏
ニ隠レ柴扉ノ傍ノ柳ハ淵明ガ村居ヲ懐ブ 先ヅ請ゼラレテ炉
辺ニ三溪先生ニ拝接ス 村家ノ趣キソレ到レリツクセリ日ヅ
モガナ 産室ニテ且ツテアリシナンヲ今ハコレ茶ノ席ニテ四
畳床 掛幅一休墨蹟 道安ノ銘みゞづくノ瓢ニはじはみ小茶
花ノ投入 午餐ノ御もてなしヲ此ノ雅境裡ニ受ク 御椀 う
なき 豆腐 芋、椎茸 青海苔 白味噌 はらゞごおろし合
煮物 自園大根 養老酒 柿酒 温泉滑カ 先ヅ俗塵ヲ流ス
水仙花浴槽ノ傍瓶中ニ満開 三溪先生ノ案内ニ依リテ長岡温
泉街 稚児ヶ淵 渡船 夕闇ノ雅趣ヲ賞シテ長岡ノ概観ヲ知
ルヲ得 晚餐後十二時近ク迄雅話ニ過ゴス 三溪先生ノ御手
前ヲ以テ濃茶ノ御モテナシアリ 茶碗ハ光悦銘黒翁 茶入飛
騷高山住人作(正) 香合染付のり色小禽唐物
美術評論藤森³⁶ 三越桜井³⁷ 福島 柴³⁸ 不在中來訪

21 松島勝之助(1893-1973)新画を扱う松島画舫を経営。

22 笹岡正民(1898-1933)1932年に御舟たちを実家のある奈良旅行に招待。実家は薬商。

23 若山菊次郎 御舟に師事。1934年再興院展初入選。

24 上田子行 詳細不明。御舟に絵を見てもらっている様子。

25 オットー・ヴァッカー(Otto Wacker, 1898-1970)ドイツの画家。ファン・ゴッホの贋作制作、販売により1932年に提訴され有罪が確定した。

26 松本真蔵 幼い頃からの親友。息子は佳男。

27 金子丈平 御舟に師事。1941年再興院展初入選。

28 速水弥(1898-1990)妻。

29 吉田正五郎(1901-?)義弟。幸三郎、弥の弟。

30 仲博明 1932年8月に御舟に入門。

31 小林古径

32 川面義雄(1870-1963)着色木版による復刻の技術者。

33 大森蕃樹 詳細不明

34 森太郎 松坂屋社員。

35 縣治朗(1897-1982)田中親美に師事した美術家、切金技術保持者。料紙研究で知られた。

一月八日

二天作、親子鳥、布袋、竹雀、孔雀、双鳩、陸治作秋景山水
黄慎作、道人、龔半千作、湖畔秋林、はせを作菊(菊のつゆな
らでひろひしぬかご哉) 竹田作田家、玉堂作山水 小野御
通作(信長の秘書)為朝義朝ノ双幅 駿牛図等観画 足利二代
義詮ノ達磨ノ名幅ハ床ニカケラレ薄茶テ御モテナシアリ 昨
午餐ノ時ニ用ヒラレタル乾山筆槍梅ノコトニ端ヲ発シ宗達ト
称するうさぎノ香合ニ就テ清談に波紋を生ズ 三溪先生ノ嚴
然タル信念ハソノ箱書ニ強シ 曰ク此ノ槍梅を解スルモノ余
ト白水庵³⁹ノミ 巴人ノ和スルモノナシトカ 巴人トハ先生
ノ談ニ唐土下里巴(所謂野蕃)ノ地ニ於テ洛陽ノ人 陽春白雪
ノ曲ヲ彈セシガ一人モ和スルナシ 遂ニ最モ低級ナル曲ヲ奏
スルニ及ンデ和スルモ多シ 故ニ高尚ナルモノ不解 俗ナル
ヲ巴調ト称スルノdealソーダ 要スルニ吾人等ハ之レ巴人
ノ輩ナランノ言ナリ 薄暮長岡洞ノ石棺ヲ先生ノ案内ニテ観
ル 月影淡ク古奈八ノ徑トテモ素バラシイ趣キdeal 夜食
後月夜ノ不ニヲ眺メル可ク水戸ノ浜ニ自動車ヲ走ラス 美観
生涯ニヤタラニ遭遇シ得可クモアラザルベキモノダ 駿牛ノ
図ヲ模ス
小谷津氏⁴⁰不在中來訪

一月九日

陶酔モ果テシナクテハト南風荘ニイトマヲ告ゲル 三溪先生
本日モ御案内役ヲ以テ願成就 院ニ北条時政墳墓 巧師勾當
運慶作弥陀ヲ拝ス 江川太郎左エ門⁴¹邸モ次デ見物スル 象
山⁴²モ寄食シタコトモアツガガ労役ノ器ニ非ズトシテ自ら他
ニ転ズ 余程偉サモアツテ蘭漢和尽ク短時日ノ内ニ解シ得テ
イタソーデト三溪先生ノ話ダ 沼津河畔すゝきノ楼上ニう
なぎノ美味を賞ス 話題ハ京都嵐山林泉寺隣華院ニ飛ブ 間
宮英宗⁴³狛下ノ居三溪先生ニ依リテ修補 青苔ニソレハ雅趣

豊カナルモノdealソーダ 夢窓国師入寂ノ地deal 臨濟
松を裁[裁]ユノ図ニ賛シテ何ヲ以テカ松ヲ裁ユ 何ヲ以テカ
法ヲトク 松自ラ青々 法自ラ空々 川上⁴⁴長倉⁴⁵両氏ノ訪
問ニアフ 三溪先生ニハコトニテ別レ東上 帰居 洵に宜キ
新春ヲ味ヒ得タリ 幸三郎兄⁴⁶天明サン來ル 自然此ノ長岡
ノ話ニ過グ

藤野源一 玉川お伯母氏等不在中來訪

病ノ草紙 しら子ノ段 ヤハリ偉イ 格ガ上dealコト自然
ニ対スル觀察ノシンラツサ 終リノ床ヲ飾ル

一月十日

玄鶏ノ下図羽根分明ヲ欠ク 益ノ助氏⁴⁷宅ニ写生 上田子行
君中禅寺ノ土産ニ干魚ヲモラウ 田中親美⁴⁸サンカラ宗達筆
伊セノ帖ヲ拝受 笹岡氏カラ靈葉ヲ拝受
上田子行君來訪

一月十一日

殆ンド終日礼状ト長岡行ノ日記整理ニアル 夜ハ田中親美氏
カラ贈ラレタ伊勢ノ帖ニ親シム 弥久方ブリニ点茶

一月十二日

鮒ノ写生 田村隆一君業務ニ苦闘ノ談 夜食後帰ル 戸田栄
次氏⁴⁹作画依頼ニ來ル 尺八横小品 長者丸新年会ニテ弥終
日和楽ニ
福島福太郎氏朝來ル 田村隆一⁵⁰、戸田栄次氏等モ來る

一月十三日

鮒写生終日 石本君來ル 桔梗ノ游鯉図ノ箱書ノ為メニ 幸
三郎兄松千代氏其他二人同伴画室ニ訪ツレル 華麗ナル衣装
ハバラノ、ニハガレソーナ感じヲ抱カセル 天心先生ノ茶ニ

36 藤森順三 美術記者、編集者。『美術評論』主宰。

37 桜井猶司(1896-1969)三越呉服店美術部員。

38 柴宗廣(1899-1979)東京出身。郷倉千鶴に師事。1929年日本美術院院友。

39 安田信太郎(1888-1978)奈良の実業家。白水庵は茶室の庵号。

40 小谷津任牛(1901-1966)東京出身。小林古径に師事。1946年日本美術院同人。

41 江川太郎左衛門 江戸時代の蕪山の代官。

42 佐久間象山 江戸時代後期の兵学者、朱子学者。

43 間宮英宗(1871-1945)臨濟宗の僧。

44 川上五郎(1882-1972)沼津の実業家。絵画展を行う沼津同好会の一員。

45 長倉新太郎 沼津の実業家。沼津同好会の一員。

46 吉田幸三郎(1887-1980)義兄。弥の兄。

47 吉田益之助(1896-?)義兄。幸三郎の弟。弥の兄。

48 田中親美(1875-1975)古筆、絵巻研究者。

49 戸田栄次 新画を扱う戸田観美堂を経営。

50 田村隆一 1932年の日記の3月10日の頁に阿佐ヶ谷に新店を開いたとある。

関スル書ヲ観ル

石本光太郎君 松千代氏等来る

一月十四日

鮒写生 午後八岡本ノ新年会に子供達を連れて行く 不相変
英さん⁵¹の趣好にて散会十二時を過ぐ 弥は葵屋主人ノ為め
島崎 朝岡両氏招待の為に出席せず調理

一月十五日

鮒写生 午後研究座談会 一時開催十時三十分散会 芸術至
上主義ノ解釈ニ就て大分深い所にふれる

一月十六日

鮒下図ニ着手 北原三佳君⁵²来ル 安食在(約一里)龍角寺ノ
白鳳ノ鑄銅仏、船形薬師ノ藤原(木彫)ノ話一見ノ価値充分に
あるらし 美術評論ノ藤森氏今年抱負トモイフ事ニ就テ話ヲ
聞キニ来ル 少年団ノ田村氏先般ノ礼に虎屋ノ菓子折トニ荒
伯ノ新年試筆ヲ呉レル
来客 北原三佳 田村金呉君等

一月十七日

凍雨小雪を交へ寒気厳し 鮒本紙ニ着手 北原大輔氏⁵³より
依頼 関宇一郎⁵⁴殿を川面氏に紹介 上田子行君来ル 清
吉⁵⁵越谷君⁵⁶等と取止めもなき雑話
関宇一郎 上田子行氏等来る

一月十八日

鮒図作画 昨日ニ引かへての快晴 琅玕堂主⁵⁷来訪 愈々来
月五日展観開催の由 玉川誠二郎[清次郎]⁵⁸君静物下図持参
批評を乞ふ 晩食後太田耕治⁵⁹氏清水素陶⁶⁰氏同伴豊島陶園
への招待のことに就て来られる 清吉 越谷君と芸術談ニ更

ける

陶業(ルチル)火ニ弱ク為めニ亦変化ノ妙在 太田耕治 清水
素陶氏等来る

一月十九日

鮒図完成 松坂屋森⁶¹氏に渡す 鴨写生下図を索ぐる 金子
君試作の下図の批評を乞はれる
寒鮒図巾一尺二寸豎一尺 紙本 森太郎氏来る

一月二十日

一睡もなし不得 未明に離床 沐浴散歩 鴨下図着手 午葵
屋主人来る 絹地求むるに就き弥幼時ノ衣を質草ニ依頼す
松坂屋森氏謝儀失念は目下非常時ニ大いにたゝる

一月二十一日

鴨下図から本紙ニ着手 長倉新太郎氏来訪 信仰の徳を談さ
る 夜天明さん随感録朗読の約をしたとのことであつたが約
束をしたといふ角田越谷二君不在 弥生⁶²和子⁶³は音楽会へ
出掛け十一時頃帰る 外は雪ニなつたそうだ
長倉新太郎氏来訪

一月二十二日

夜来の雪美観 鴨図作画 大谷⁶⁴氏の代理とて井内秀太郎氏
来訪 歌舞伎座貴賓室ノ床幅作画ニ就て二尺巾一尺六寸豎の
もの 午餐共ニす 酒井福次氏之亦作画希望の為め来る 小
切手参百円出せしが完成のあかつきならではと辞す 角田
越谷二君は昨夜は仮睡にて不知といふナンセンスあり
井内秀太郎氏

一月二十三日

加藤音吉⁶⁵老来訪 七十三才の寿像を写す 昨夜来風邪ノ氣

51 岡本英 実妹麻子の夫。

52 北原三佳(1895-1972)鑄金作家。北原大輔の弟。

53 北原大輔(1890-1951)陶磁史研究家で御舟の実妹輝子の夫。帝室博物館勤務。

54 関宇一郎 陶磁器の研究者。『原色陶磁大観』(1943年)の著者。

55 角田清吉 福島県出身。1932年再興院展に初入選。

56 越谷長太郎 御舟に師事。

57 林数之助 新画を扱う琅玕洞を経営。

58 玉川誠二郎 1932年の日記では玉川清次郎。玉川の伯父、伯母の息子のことで吉田誠二郎(善彦、1912-2001)が正しい。御舟に入門。

59 太田耕治 美術雑誌の関係者か？。

60 清水素陶 『大日本窯業協會雑誌』45号(1932年)中「絵皿の会」に名前あり。

61 森太郎 松坂屋社員。

62 速水弥生(1922-2017)長女。

63 速水和子(1924-2009)次女。

64 大谷竹次郎(1877-1969)歌舞伎座の経営者。

味あり 意のまゝに写せず 殆んど半日之が為めに費やす
夜は天明 葵屋主人 河村 忽那⁶⁶君等にて雑話

一月二十四日

終日終夜発熱悪寒 嘔吐ニ苦シム 体温八度五分 加藤音吉
老久闊目ノ東上ナレドモ如何トモ仕方ナシ 葵屋主人ト松竹
レビュー見物に出掛ケル

一月二十五日

本日モ尚イヘ難シ 臥床 幸三郎兄切符ノことにて(試作)来
ル 加藤音吉老帰郷 体温七度四分 終日高下ナシ 宿便ノ
故ナランカ

一月二十六日

臥床 体温七度 玉川誠二郎君ダリヤ静物例ノ下図ノ批評を
求む 弥太郎君⁶⁷が見へたので此の家の将来ノ話をする な
やみの種だといはれる 吾々も分を守る可き最低の生活を欲
する 心の豊かなることを求める

一月二十七日

新に雇ふときといふ女中父親同伴来ル 真岡ノ話しを聞く
歌舞伎招待を受けてあるので、益の助⁶⁸夫人 小沢伯母等
を誘ふ 菊五郎⁶⁹の鏡獅子は私にも芸の尊さを感じさせる
絵も勉強しなければといふことも 清方さん⁷⁰の一連も見へ
る

一月二十八日

画室入室 鴨作画 午後中山清君⁷¹暫らく振りに来遊 新薬
師寺の現住の奇行僧の話を書く 三上夫人菊の絵持参 為恭
ノ赤染右衛門ノ図を菊花ノ屏風写とを借す 夜は天明さんと
と昨日の演劇の談

一月二十九日

萱間氏 北原大輔氏自働車ニテ怪我ノ報ヲモタラス 鴨作画
前進 青木進次郎⁷²君来遊 葉草ノ談アリ 劇毒(馬銭子)枯
梗ノ根(咳)(芥子モルヒニアヘン)チキタリス(心臓)

一月三十日

鴨作画 高橋⁷³君上京 杉木立ノ作品持参す 小山⁷⁴君来遊
夕刻迄高橋 天明両氏等と雑話 夜研究記録推考 高橋君等
と 金子⁷⁵君ダリヤ下図持参 大分まとまる

一月三十一日

鴨図完成 長茶亭ニコノア試飲 雅叙園ノ伊藤淳 吉林周造
両氏作画ニ就テ来訪 玉川ノ伯父方違ヒノコトニテ来ル 節
分ニ画室ニ泊スレバ宜イ由 此位ナレバワケナシ 残雪ノ
美趣深シ

二月一日

矮鶏図着手 齋田⁷⁶、佐藤梅軒⁷⁷同伴来訪 唐辛箱書と作画希
望にて 森太郎氏寒鮒ノ礼に来る(百五十円) 尚名古屋展
作画を希望する 研究会為めに小生デッサン不参加 夜の雑
談 金子君の講話 案外に静かに閉会 大毎社代理作画希望
に来る

二月二日

矮鶏図作画 林⁷⁸琅玕堂主督促ニ来ル 夕刻酒井福次氏来遊
作画依頼ノ為め 菓子折拝受 第三期納税漸くすます

二月三日

矮鶏図作画連続 夜キング徳江氏来ル 用件拙作日向葵図キ
ング誌に利用ニ就テ、アッタガ断ル 名士訪問ノ印象ノ雑
話アリ 実業家ニテハ郷男⁷⁹ 軍人ニテハ林大将⁸⁰、岡田前海

65 加藤音吉 茂原市山崎に住む御舟の親戚。

66 忽那有明 御舟に師事。

67 吉田弥太郎 弥の長姉八重の長男。

68 吉田益之助(1896-?)義兄。幸三郎の弟。弥の兄。

69 六代目尾上菊五郎(1885-1949)歌舞伎役者。

70 錦木清方(1878-1972)日本画家。

71 中山清之(1899-1989)京都出身。安雅堂画塾に入門。1928年日本美術院院友。

72 青木新次郎 実兄蒔田實の妻の兄。

73 高橋周桑

74 小山大月

75 金子丈平

76 斎田元次郎か。美術雑誌『塔影』主宰。

77 佐藤梅軒 新画を扱う梅軒画廊を経営。

78 林数之助 新画を扱う琅玕洞を経営。

相⁸¹ 文士ニテハ島崎藤村⁸² 画家ニテハ横山先生⁸³等数ふ可
き印象ヲ語ル

二月四日

矮雞図完成 富取君幸三郎兄と小山兄宅ニテ会する約束をす
る 天明さんを誘ひ同図瑠玕堂へ届けて行く 諸氏等と新宿
ニ出て不相変樽平ニテ一盞かたむけ帰宅 吉沢といふ人が錦
趣と題せる偽作の鑑定に来ル

二月五日

六潮会拝見 牧野⁸⁴氏溪流、温泉町を賞す 横川、佐伯氏等
に会す 子供達の靴下等求める 清吉に物質線に超えんこ
との注告厳し化する 桑名さんに襖張換へ依頼す 久關目ニ
村田⁸⁵君来訪 生活戦線上の談

二月六日

清吉君眼診察ニ就テ鈴木さんへ紹介スル 橋本秀二郎氏来訪
鴨ノ図渡ス 雅叙園伊東氏来ル 幸三郎兄ト翠苔緑芝京の家
奈良の家見せる 高橋初郎氏来月十七日開店 高島屋展観ニ
就テ作画依頼に来ル 岡本麻子⁸⁶正ヲ同伴来ル 夜村田 天
明 兄等と阿佐ヶ谷の売家を葵屋主人と見て来た 幸三郎兄
帰って来てそれ等の話 今村紫紅⁸⁷の追憶等の雑話

二月七日

翠苔緑芝等のことに就て田中良助⁸⁸氏来訪 清水氏表装個展
ノ作画依頼ヲ受ク 建築ノ談等在 午食ヲ共ニス 画帖二目
白山茶花図ヲ描ク 夜書生サンコウタイの話幸三郎兄トスル

二月八日

岡本から電話あり 入原氏還暦祝ノ為作画希望あれども直ち

に為し難しを伝ふ 鈴木平八氏清吉症状さしたることなき電
話を受く 二尺巾立一尺五寸に朝顔図の下図をつける 雞の
クロッキー等判然としない日である 作画がどうも度強くな
る うすいといふこと それは仲々に為し難きものである
内容ある低音は人を引つける いたづらに声張り上げて呼ん
で見ても内容無きに及ではむしろこっけいなものだ

二月九日

朝顔図本紙着手 砂に浴ス雞ノクロッキー 大刀川勇吉氏作
画希望ニ来訪(二尺横物) 五反田ニ移ッテ来たソーダ 夜は
外遊日記整理

二月十日

朝顔図作画傍ら鯉ノ写生 どうも風邪の気味あり 早目に就
床

二月十一日

小林さんの訪問を受く 晩成軒⁸⁹主の寄贈になる彩色刷毛を
届けて呉れる 何だか調子が宜さそうである 別宅銀婚式祝
賀ノ午餐会に一家を上げて参席 呉服橋の日光ニ於て 三越
にて手織機の会等見て帰る 不在中湯山⁹⁰氏来りし由 桑名
さんに襖紙換をしてもらふ

二月十二日

朝顔図作画 応接間整理ニ殆んど終る 午後橋場の東城君来
訪 エジプトの談数時 夜は女中達に接客の法を教へる

二月十三日

鯉魚写生 夜西島⁹¹ 青柳⁹² 牛田⁹³ 黒田⁹⁴兄等来訪 青柳
君作品籠鳩図諸兄等と批す 日本名画譜法隆寺壁画三面幸三

79 郷誠之助(1865-1942)実業家。番町会の中心人物。貴族院男爵議員。

80 林銑十郎(1876-1943)軍人、政治家。陸軍大将。

81 岡田啓介(1868-1952)軍人、政治家、海軍大将。海軍大臣をこの年1月9日に病気の為辞任。

82 島崎藤村(1872-1943)詩人、小説家。

83 横山大観(1868-1958)日本画家。再興日本美術院の中心人物。

84 牧野虎雄(1890-1946)洋画家。

85 村田泥牛(1903-1980)神奈川県出身。小林古径に師事。1930年日本美術院院友。

86 岡本麻子 実妹。正は息子。

87 今村紫紅(1880-1916)横浜出身。赤曜会のリーダー。日本美術院の再興に際し経営者同人となる。

88 田中良助 新画を扱う東京会を経営。

89 晩成軒 上野の画筆商。

90 湯山昇 新画を扱う白日荘を経営。雑誌『白日』編者。

91 西島廣造(1905-?)御舟に師事。1927年再興院展に初入選。

92 青柳五柳 函館出身。1937年再興院展に初入選。

93 牛田雞村

94 黒田古郷

郎兄届けて呉れる 弥は玄米の話を交詢社二聞きに行く

二月十四日

鯉魚写生 大山氏雑話ニ来訪 雅叙園伊藤氏より例の話しは予算の爲め不調の返事あり 一条ノナンセンス 横尾⁹⁵君出京 今度は江戸在住ノ意気込み 葵屋主人来ル 夜天明 横尾君等と雑談

二月十五日

鯉魚写生 午後は研究例会 横尾、高橋両君を交へ案外二賑ふ、暴風砂塵を吹いて寒気烈し

二月十六日

鯉魚下図 桃花鯉魚 春池温トカイツツ気持ノ出ルコトヲ高橋君作品疎林図ト風景二点見る 簡明ナルヲ宜シトス 夕刻妻君ト帰居 弥太郎君ト佐伯保険不成立ニ就て話アリ

二月十七日

朝来ノ大雪万目美観 鯉魚下図 葵屋主人佐伯問題ニ就て来る 井内氏亦大雪を冒して作画督促二次いて来春都をどりノ床二尺五寸巾立二尺二寸位ノもの併せて依頼 夜大沢氏町田氏初節句祝紙作画依頼の爲め来る

二月十八日

鯉魚下図 積雪の情趣ニ引かれ写生 石本君桔梗よりの招宴の打合せに来る 廿四日午後五時半と定める テロ⁹⁶病勢つのである 小島医師の来訪を乞ふ チステンバアが脳を冒かしたので到底駄目だそうだ 夜注射 むしろ慈なる由にてほどこす 雪中三尺ノ穴に葬る 思出ともならんか 病苦の状写生 葵屋主人ミレー画集渡す

二月十九日

吉田君⁹⁷静物図持参 どうも色彩混だくの憾みあり 相沢⁹⁸氏来訪 別宅兄等と午餐雑談 土井⁹⁹、原田両氏来り三月開催の作画督促 青柳君鳩図持参 大分進境あり 亦忽那君の作品も明るさ色好感を持つ 佐伯家一統来駕晚餐

二月二十日

桃花鯉魚ノ下図遂に横ニ改める 金子君ダリヤ図批評を求めに来る 試作出品忽那君鉄橋風景 金子君ダリヤ 青柳君鳩以上三作 弥二郎¹⁰⁰君ノ百日忌一族にて晚餐を共にす

二月二十一日

試作鑑査 安田さん¹⁰¹へ電話す 寛選に就て 金子 青柳両君入選 忽那君一人落選はいさゝか憂愁である 富取 小山両君座談会再興の意にて拙宅に集る 不在中長沢氏画帖とりに来られ謝儀五十円拝受 尚尺二作画菊箱書希望さる 湯山氏も来られし由 今春開催展のやはり作画希望 来月十六日龍角寺行の約束をする

二月二十二日

桃花鯉魚図本紙ニ着手 葵屋主人父七回忌法要ニ就て来る 長沢氏菊花箱書してそれを届けることを託す 夜幸三郎兄 青柳 金子君等見える

二月二十三日

桃花鯉魚図作画 小山君の来らるゝのを待ちて共に御殿山梅若楽堂に久らくめて御能拝見 美術院諸君来会 羽衣、木曾望月 狂言、羽衣の天女の橋かゝり青金と古朱ノ調和 望月ノ獅子舞東次郎ノ太郎冠者感銘殊々深し

二月二十四日

北原三佳氏を訪問 鍍金刀剣等ノ有益ナル談ヲ聞く 午餐ノ御もてなし后附近ノ鑄物工場見学 ホドノ灼熱 ヤカド フイゴ等々大いに興在 理髪 五時半集合 新橋駅ニ小林 石本氏ト今夕は幸三郎兄ヲ交へ桔梗ノ招宴ニ応す

二月二十五日

桃花鯉魚図作画 中色紙砂子蒔つぶしニ桃花図を大沢依頼のもの 夜食後腹痛あり

二月二十六日

笹岡正民君早朝来訪 古代雜を拝受す 絹本梅ノ陽春箱書を

95 横尾木雞(1903-1988)山梨県出身。御舟に師事。1928年再興院展に初入選。

96 速水家の飼犬。

97 吉田善彦(1912-2001)吉田幸三郎の従弟。御舟に師事。1964年日本美術院同人。

98 相澤興次郎 横浜で中村房一郎に仕えた。息子に相澤幸雄。

99 土井久吉 京都で新画を扱う土井撰美堂を経営。

100 吉田弥次郎 弥の長姉八重の次男。

101 安田鞆彦(1884-1978)東京日本橋出身。1914年日本美術院同人。

依頼を受く 中色紙描き上げる 藤森氏来り画作希望あり
夜墨整理 幸三郎兄 別宅夫妻 天明さん等にて雑談

二月二十七日

桃花鯉魚図作画 吉住小太郎¹⁰²氏来訪 沢田竹治郎¹⁰³氏も来
会雑談 夜大沢に桃花色紙渡す 上弦の月美し

二月二十八日

桃花鯉魚図作画 名古屋新聞小品展開催に就て大宮 大島両氏
来訪 廿五日開会十八九日頃迄にといふ事である 鶴心堂
氏¹⁰⁴露潤の箱書依頼に来る 夜は退夜に自由ヶ丘に行く

三月一日

桃花鯉魚図あらし完成に近づける 父七回忌 北原輝子¹⁰⁵
一周忌法要 鳥山に出掛ける 時雨れた寒い日だ 今の場合
家にて手料理にて参会の方々をもてなす まあ無事に了る

三月二日

鯉魚(浮華潜鱗)下図にかゝる 田中万宗氏 足立喜慶氏同道
新愛知¹⁰⁶オセロ美術部開催に就て作画依頼に来訪 五月初旬
の由 午後研究例会 小山君来賓として参席 十時閉会

三月三日

浮華潜鱗本紙に着手 金子君に訓戒 夜昨年度作品調査 深
更地震あり 三陸地方激し 金華山沖震源

三月四日

浮華潜鱗作画 労作図小下図工風[夫] 人事移動に就て幸三
郎兄と話す 金子 越谷(長茶亭)忽那 角田(拙家)と定める

三月五日

浮華潜鱗図作画 所得税のことにて弥を高石さんへやる 大
沢桃花の謝意を表しに来る 小雨に大地潤ひ春のさざし枝上
ニ表れる

三月六日

浮華潜鱗遂に改作することに落ち入る 黒の隈に欠点がある
小山 富取両君正五郎君祝賀の為め来訪 夜忽那君移動に付
て訓戒 くじ引して部屋割を定める 清吉四畳 忽那四畳半

三月七日

浮華潜鱗第二作に入る 此頃の寒気春とも思はず 夜大山廣
光¹⁰⁷君来訪 美の国十周年記念展開催二作画依頼である 四
月廿日招待とか

三月八日

浮華潜鱗図作画 亦春雪の美観にをゝはる 岡本英君 正五
郎君の祝賀に来駕 経済受難一段と加はる

三月九日

浮華潜鱗図完成 牡丹ノ下図に着手 関尚美堂主¹⁰⁸来訪五六
月展観開催に就て作画希望あり

三月十日

巻毛カナリヤ春謳歌図下図 次いで本紙に着手 一尺八寸五
分立一尺七寸絹本 夜忽那 角田両君に今後掃除の手配を定
める 川上さんが和楽に見えた由 弥太郎君宿泊

三月十一日

夜来ノ大雪 春謳歌図作画 本日は正五郎君結婚式 丸ノ内
ホテルにて挙行 午後天気快晴のめぐみあり 沢田竹治郎氏
夫妻の媒尺 先づノゝめて度し

三月十二日

春謳歌図完成 大島隆一氏来訪 名古屋新聞展ノ督促 亦石
川 大山両氏も来訪 作画希望重ねてゝある 夜天明 川
上両氏と僧堂の話等

三月十三日

平林寺ノ紅梅写生 高谷氏来訪 五月上旬展観作画希望 関
如来¹⁰⁹翁次いで来駕 省亭¹¹⁰ノ性格等ノ話 夜天明 川上

102 吉住小太郎(1908-1983)四世吉住小三郎の長男で1963年に五世吉住小三郎を襲名。

103 澤田竹治郎(1882-1973)内務官僚、裁判官。1947年最高裁判所判事。

104 中村豊。表装の中村鶴心堂を経営。

105 北原輝子 実妹。夫は北原大輔。

106 新愛知 名古屋の新聞社。

107 大山廣光(1898-1970)劇作家、評論家。

108 関長次郎(1890-1963)新画を扱う関尚美堂を経営。

109 関如来(1866-1938)美術評論家。

別宅兄等会し共産主義ノ話等 弥風邪臥床

三月十四日

梅花写生 高島屋高橋氏ニ浮華潜鱗図を渡す 桑名氏ニ仮張依頼す 三上夫人菜花ノ絵を持参 弥、和子共に熱八度 庄司先生ノ来診を乞ふ、病性気管支加多留

三月十五日

紅梅下図 郷倉¹¹¹君個展拝見 歌舞伎招待 菊吉合同興行 光秀 妹背山 身がはり座禅 髪結新三、山下佐伯両婦人葵屋主人同行 朝子¹¹²発熱九度三分 小生も亦風邪の気味 一家ことノ、くくなやまさる

三月十六日

風邪臥床 雨天 弥生のみ健全 登校当学期成績精進境ありといへども未だし

三月十七日

終日風邪引籠 高橋君出京 白梅図持参 亦オセロ新愛知依頼に就ての話にもありて 湯山氏来訪 不会 廿日乃至卅日ニ就ては何か呉れとの話

三月十八日

離床 紅梅暗香図に着手 ○印展観とかに就てその選択を幸三郎兄天明氏と為す 桑名氏亦その装を為す 夜雑話に馬ノ話あり 垂直正身長ヲ此にて計ル 風に向って必ず立つ毛並ニヨル 水馬は身を后ニスル

三月十九日

紅梅暗香図作画 小林さん来訪 親美さん¹¹³の模写されたる卅六人集の内いせ、つらゆきを見せられる 王朝優雅うらやむべし 田中氏等と和楽に午食 吉住氏も会す 藤森氏来訪 雑話 伊達錦氏先生ノ箱書して呉れと来られたが辞退す 西行ノ図であった 夜西島君耐を持って来て呉れる 形式表面に走る現今ノ情勢慎む可からさらんや 潤ノ欠くるを省みる

三月二十日

暗香図作画 午後研究会 戸田栄次氏作画督促ニ来訪 夜太田耕治氏見える 牧野虎雄氏ノ話等して帰る 弥発熱三十九度三分 朝子も再び臥床

三月二十一日

弥熱依然として去らず 庄司先生ノ来診を乞ふ へんとう線炎ノ症状 大風埃を上げ不愉快限りなし 紅梅図作画 富取君来訪 雑話 出雲焼ノ皿二面拝受す 別宅隆一¹¹⁴君帝大入学

三月二十二日

紅梅図になやむ 大宮、大島両氏来訪 巻毛カナリヤ図渡す 病の草紙地獄餓鬼を見る とりわけ病の草紙の卓抜なる技敬ぶくの至り也 天明さんと清吉君にピール会社ノ絵引とりにつひて話す 清吉の意善哉々々

三月二十三日

紅梅図作画 田中有美¹¹⁵氏告別式参拝 淡交会、高島屋展観見物 先生¹¹⁶桃近來ノ作敬ぶべきものなり 学ぶべしノ、祇園のほこ(月)応挙の夏花之亦感ず はやしに興ず

三月二十四日

紅梅図仕上げる 庭前の椿花開花写生す 松坂屋森氏寒鋤箱書旁々作画督促に来訪 本格的作画道痛切に感ず 夜源氏等々の打込んだものに接し心をうるをす

三月二十五日

椿写生 小山君来遊 終日殆んど雑話 夜和子朝子ノためにシネマ映写 弥生は琴演奏会に出掛ける 再び寒気厳なり冷雨も交りて

三月二十六日

椿花下図に着手 夕刻如来翁来訪 幸三郎兄別宅はなれ両兄等と雑話 法界寺天人は金魚ノ遊戯を幻想する はりの宮殿

110 渡辺省亭(1852-1918)日本画家。花鳥を得意とした。

111 郷倉千靱(1892-1975)富山県出身。1924年日本美術院同人。

112 速水朝子(1927-1993)三女。

113 田中親美

114 吉田隆一 義兄吉田豊吉の息子。

115 田中有美(1840-1933)日本画家。田中親美の父。

116 横山大観

三月二十七日

椿花図本紙にかゝる 松本といふ青年来訪 芸術ノ事に就て論ず 橋本氏鴨図の謝礼に(二百円)来る 湯山昇氏も会し支那争乱ニ就て種々の談あり 湯山氏に夜梅の図渡す

三月二十八日

椿花図画作 庄司先生弥ノ為来診 晴たれども風烈し 夜松本修二氏宛墨ノことニ就て断る返事 田村一郎宛赤坂叔父逝去に就て悔状

三月二十九日

椿花図画作 松本真蔵氏子供二人連れにて来たか 獨立展へ出掛ける 忽那 角田 両君同行 浜作にて晩食 次いで銀座散歩 三越七階向日荘展も見る 朝子和子は岡本いなり祭に行く

三月三十日

椿花写生続いて下図 花肉の感覚 壁画及鳥毛立女等の本格ニ引かれる 池田といふ本郷ノ人が且つて森田夫人に贈りし螢の扇面を大垣の人から求めたとて鑑定に来た

三月三十一日

春雨に暗し 椿花下図 小林さん来駕 画人境地種々交話 本格的基礎のなきものは危い 明確なる線の重要 経験をつむに從ひ亦深さを加えるにつれて?にな[ら]ざるを得ない 弥生茅ヶ崎より帰る

四月一日

清光会を観る 坂本氏¹¹⁷の聖者の静さ 安井氏¹¹⁸の重庄 梅原氏¹¹⁹の複雑なる単化 その力強き線はよき雪村の線に似た

るものあり 小林氏¹²⁰の犬ノ豆の白き花は自然性が巧みに表現されてゐる 研究例会¹²¹ 武久¹²²君めづらしく現れる 横山先生¹²³から朝鮮の展覧会の鑑査に出席してはとの電話を受く 満谷¹²⁴有島¹²⁵松岡氏¹²⁶等の一行である 五月九日

四月二日

椿花図下図成り本紙にあたりにかゝる 夕刻幸三郎兄と横山先生訪問 朝鮮行を定める 幸三郎兄は二日会 小生は先生に誘はれ伊せ梅に行く 九時三十分頃辞す 電車中にて大本先生に会す

四月三日

椿花図 線から着彩に入る 佐伯¹²⁷さんの子供達遊びに来子供達喜ぶ 七條¹²⁸さんの子息三高工芸に入学 同氏父君の笑顔に接す 夜天明さんと朝鮮の話を開く 庄司先生に一家種痘す

四月四日

椿花図着彩を進める 美術学校田邊孝次¹²⁹氏に電話し朝鮮行に就て十一日以后同校に正午過ぎ訪問する約をする 朝鮮の事多少検べる

四月五日

椿花図画作 午後清光会安田さん¹³⁰の作拝観 力強さの加はる欣快に耐えず 風月にてスーブ二合アイスクリーム求め木村さんを見舞ふ 次いで市川に富取君を訪つね晩餐の御もてなしを受く 菊地公明¹³¹君に会す 下図風景を評す

四月六日

子供達に誘はれて三越行 白田[日]会展及古代風俗展催され

117 坂本繁二郎(1882-1969)洋画家。

118 安井曾太郎(1888-1955)洋画家。

119 梅原龍三郎(1888-1986)洋画家。

120 小林古径

121 このときの講話記録は『速水御舟(一)』(学習研究社、1992年6月)pp.172-174に掲載されている。

122 武久勇三 御舟に師事。

123 横山大観

124 満谷国四郎(1874-1936)洋画家。

125 有島生馬(1882-1974)洋画家。

126 松岡映丘(1881-1938)日本画家、東京美術学校教授。

127 佐伯善子 吉田家の一員。横浜シネマ協会を設立した佐伯永輔の妻。

128 七條憲三 吉田幸三郎と印刷会社を経営。

129 田邊孝次(1891-1945)東京美術学校教授、工芸史。

130 安田靉彦

131 菊池公明 日本画家。

てみた 正五郎君夫人来訪 椿花図作画 夜村田君来り 天明さん等と小林さんの話多し 朝子の誕生日である

四月七日

椿花図作画 高橋君上京 紅白梅ノ花二図持参す 幸三郎兄風邪臥床を見舞ふ、大山氏美の国展ニ就て亦高橋氏浮華潜鱗図謝礼に(二百円)来る 夜は別宅兄に誘はれ日比谷公会堂の拳闘を見る ヤングアルデ¹³²、シルアンの二十回戦は手に汗をす

四月八日

椿花図作画 午後幸三郎兄ノ意を伝ふる為め小山兄を誘ひ青山二橋家を見舞ふ、帰途新宿中村やにて支那まんぢゅう求める 子供達の喜びである 高橋君家が見付た様だ

四月九日

湯ヶ原小林¹³³氏へ電話し明日訪問の約をす 椿花図完成 高橋夫人上京 清吉ノ兄中学検定試験にて上京し来る 終日降雨 陰気なる一日である

四月十日

大磯安田氏¹³⁴を訪ふ、朝鮮行ノ話しをする 亀甲ノ硯面漢時代の味深きもの 天女の光背 漢時代の磁瓶等拝見する 革丙会の作画中雑話にご迷惑を掛ける 午後一時三十六分発湯ヶ原に小林さんを訪ね過般を約をはたす 梅花山腹にらんまん 祭礼のはやし 仮装亦興をそえたりか 一浴過日來の労を忘れ大倉公園の勾欄■■の景趣に暮色の暈るを気づかず 大久保 伏原¹³⁵両氏に偶然会す 夜は病の草紙にそのしんらつたる筆技に夜更るまで交話

四月十一日

薄曇 広河原辺迄散歩 三ツ又、椿、水仙 菜花 柿 それ等の味ひを賞す 伏原氏栖鳳先生¹³⁶の鷺の作を持参す 昨夜は一時過ぐるまで通なるものを発輝致されし由 天野屋支配人の求めにて陶器にねずみの図を描く わざノ、駅迄御送りを受けて辞し逗子に小茂田君¹³⁷の病状を見舞ふ、漸く安静に近づかれし由 夜色深くさっぱり見当つかず 人力車の便を

以て有耶無耶のうちにかく見舞だけは出来た 幸三郎兄未だ癒へず 見舞ふ、天明 猪股氏等会す 不在中名古屋新聞 大宮氏かなりやの謝礼に(三百円)亦美の国、小山氏等来駕

四月十二日

障屏画ノ展観を博物館に拝観す 両山水屏風 法隆寺蓮池水禽屏風に敬伏する 神護寺ノ画格は大乗寺のしとやかなるうるほひは吾が大和の自然を写されて遺憾なし 蓮池図吾を天上の楽土に遊ばす 午後美校に田邊孝次氏を訪問 朝鮮行の打合せを為す 大塚駅下車 万作堂に拓本用具を三省堂に安部氏青丘雑記を文房堂に水絵の用具等求める 帰途降雨 天明さんの傘を借り 不在中大塚巧藝社の人広瀬氏来訪されしと 夜天明さん来り雑話

四月十三日

尚美堂夫人五月下旬同会に就て亦引越を麹町にされしに就て来る 山椿写生 葵屋主人茅ヶ崎地面のことで来る 小山君和楽の帰りに寄る 加藤といふ人版画の持参 小山君と見る

四月十四日

高橋君上京 印のことにて直ちに帰居 椿花写生続みて朱花琉璃鳥の下図に着手 幸三郎兄漸く快よく画室に見ゆ 北田さんとか弥の友達来訪 夜は幸三郎兄天明さん隆一君等と雪の談 青柳さん白梅の静物持参評す

四月十五日

忽那君に絹を買に行ってもらふ、朱花琉璃鳥下図 高橋君東上借家の手つゝゝきの為め 午後研究例会 大山氏夕刻作画督促に來れり 降雨 桜花満開

四月十六日

朱花琉璃鳥本紙に着手 二尺巾立一尺七寸絹本 小林さん湯ヶ原より帰られ来駕 松本真蔵氏 山岸氏同行大観先生松竹梅対幅鑑定に持参 六尺巾の紙本 真性疑ひあるべからざるもの 石川氏情の切なるをうったへに来る 廿一日開会に就て

132 ヤング・アルデ フィリピンのボクサー。草創期の日本のボクサーとも対戦記録がある。

133 小林古径

134 安田鞆彦

135 伏原 京都の表装店伏原春芳堂を経営。

136 竹内栖鳳 京都の日本画家。湯河原に隠棲。

137 小茂田青樹(1891-1933)埼玉県川越出身。安雅堂画塾以来の仲間。1921年日本美術院同人。

四月十七日

朱花琉璃鳥図画作着彩 広瀬氏東神倉庫の松田氏の依頼にて画帖用絹持参せられたれど奥村氏のことあり辞し了解を得朝鮮總督府より本年度ノ鮮展の審査員を任命の状来る

四月十八日

朱花琉璃鳥多少手をつけたが三佳¹³⁸さんの訪問に会ひ終ひに日を了る 農工銀行の人茅ヶ崎のことにて来り 夕刻大山氏次いで石山大柏氏¹³⁹訪客に一日過ぎる

四月十九日

朱花琉璃鳥図作画 葵屋主人茅ヶ崎のことにて同所へ農工の人といってもらふ 夕刻和子を連れて長者丸散歩 桜花稍盛りを過ぎ落花の趣きあり 夜吉田勇吉さんに朝鮮の話を書く

四月二十日

朱花琉璃鳥図完成 美の国社に渡す 使のものが迷って遂に大山氏来る

四月二十一日

白玉椿八重腐花等写生 幸三郎兄ノ依頼にて百円立替 東京会画帖着手 庄司先生宅へ腸チブスの注射をしてもらひに行夕子供達と散歩 桜花雪の如く地に敷く

四月二十二日

白玉椿作画 高橋夫妻上京 午後春雷しゅう雨 夕刻小山兄来訪 然れども帝国ホテルに福井氏訪問の約あり そのまゝ出掛ける 目黒駅にて別れる ホテルに幸三郎兄と会す 福井氏より朝鮮の話を書く やはり江西の古墳を多とす

四月二十三日

白玉椿図作画 概略完成 夜は歌舞伎見物 弥別宅姉正五郎夫人等にて小林さんの一族も見へる 六代目の三番梅幸¹⁴⁰御とみが見る可きものか

四月二十四日

最初の紅椿の不備な点に手を入れる 観て行けば益々その欠点が現れて来る 高橋夫妻帰居 夜佐藤梅軒氏来駕 不相変多数な作家の品持参 小生作画督促の要用

四月二十五日

紅椿の修正に過ごす 三上夫人椿図持参 忽那君に北原さんへ使に行ってもらふ 夜太田さん例の学校のことに頼に来たが断る 気の毒ではあったが 戸田¹⁴¹作画督促に午前中来る

四月二十六日

尺五の紅八重椿に修正の手を付ける 尺巾にあやめ図下図を始める 夜池田¹⁴²父兄別宅の招宴 小生も陪食 雨晴れ風出る 早や新緑の節に入る

四月二十七日

尺巾あやめ作画 尺五紅八重椿完成 夜は北原大輔氏より朝鮮の話しを聞く 及衣川¹⁴³氏へかねての約にて紹介 同氏陶磁器三四鑑定に持参 夜二時に及ぶ 遂に大輔氏は泊る

四月二十八日

あやめ図作画 土井より桃鯉の謝礼として二百円送ってくる 大毎へ紅椿横物発送する 高橋君出京伴に国展春陽会見物 幸三郎兄に会し研究所に小場氏¹⁴⁴の楽浪の話を書く 百二十八号墳昭和七年発掘 王光、同妃の墓 銀座に出てお慶ずしに寄り同夕は小山 富取両君小生四十の祝賀の会を催うして呉れる 品川弁慶にて次いで本宿散歩 不動尊参拝帰る 天明さん談話会をしていた

四月二十九日

あやめ図概ね完成 高橋初郎氏水に関スルものと水墨のものとの作画依頼に来て春木南湖 南溟 南溪の祖先話して行く 平福¹⁴⁵さんを訪問したが不在 百軒店にて理髪等して帰宅 夜は市川といふ人來り 土木の話 子供達は天長佳節で休み 自由ヶ丘へ出掛けた

138 北原三佳

139 石山太柏(1893-1961)山形県出身。1914年日本美術院院友。1935年に脱退。

140 六代目尾上梅幸(1870-1934)歌舞伎役者。

141 戸田栄次

142 池田兵三郎 吉田正五郎の妻の父。

143 衣川水門 外務省の役人。

144 小場恒吉(1879-1958)東京美術学校講師、朝鮮總督府宝物古墳名勝天然記念物保存会委員。

145 平福百穂(1877-1933)秋田県角館出身。日本画家、歌人。

四月三十日

尚美堂主作画督促 麻岡部長本宅にての代理店希望の要件相沢父子帝大入学の喜びを以て 石川美の国主謝儀百八十円持参 泣きを入れに 高谷氏代理作画督促等々来客次々に来訪 横山先生に愈々三日出発に付て参候 帰途丸善にて鉛筆朝鮮の膳 高島やにてシャツ求め電話にて幸三郎兄の都合を聞き小場氏訪問は明朝にする 増原美術店よりの菊の図 高島屋への浮華潜鱗箱書を済ませる 今朝昨日の礼の為に平福さんより電話を受 夜天明、幸三郎兄等と雑話

五月一日

幸三郎兄と小場氏訪問 朝鮮古蹟に就て蘊蓄深き氏の高話を八時間に渡りて拝聴す 夜は研究会に替れいをあたへ松岡氏九時廿五分発を東京駅に送る 岡本麻夜たつねて来た 桑名さんから写生帖出来て来る

五月二日欠

五月三日

朝鮮總督府第十二回美術展覧会審査の爲め渡鮮 赤飯に前途の多幸を祈る 夜來の風雨漸くをさまり春月中天に情有 東京駅にて田邊孝次氏に会し午後九時四十五分下関行急行にて出発

ライカ番号 No 41082

五月四日

寝台ノ夢は初夏の輝く光に破られ昨日に引かへて此れは亦快晴なり 尾の道糸崎嶮島の風光は曾遊の喜びをまた新にす 田邊氏との雑話に左程の退屈もなく下関九時四十分着 関釜連絡船に乗船 一等の船室に久方目に船室生活をなつかしむ 船中一巡 三等船室発酵するか如き空気 出帆のドラは一女性の双眼に涙を下し一青年に天照大神と連呼 訣別風景多彩である 稍をぼろなれども半月美はし 海上静穩

五月五日

良港釜山入港八時 午前九時州分京城急行洛東江沿岸の風光

と鮮人の風俗感興深し 京城日報竹田といふ人水原近く乗車 鮮展に関する所感を求めらる 京城五時着 總督府の諸氏 新聞社員 松岡¹⁴⁶さん等数多の御出迎感謝す 先づホテルに落ち着く 十七号の室 サルンにて満谷¹⁴⁷ 有島¹⁴⁸両氏に拝眉 一浴の後加藤氏御招待の意を以て晚餐を白雲荘に催す 元李氏の外の金嘉沈氏¹⁴⁹の邸を料亭に致せしものにて鮮風の趣き深く亦宴に妓生数多待しすっきり鮮風を第一日既に味ふ 宴後明治町丸ビルカフェーに行き一時三十分近くホテルに帰ル 半月中空に清く静寂なる京城の夜 折々道行く妓生の瀟洒たる服装極めて調和宜

五月六日

ホテルの自室にてのトースト果物の朝食は欧州旅行を懐かしめる サルンにて諸氏と鑑査の打合 併して景福宮背後の会場に行く 午後二時頃迄に概略鑑査を了 明日に決定を残して一先づ帰宿 小憩の後小生のみ三越にカラーを求め旁々本町通散歩 不図佐々木氏¹⁵⁰他加藤¹⁵¹、大館¹⁵²弘井氏等に会す 明治製菓樓上にて喫茶 鮮展に対する希望等々の談 次いで水標橋京城見番鐘路バコダ公園見物 松竹園にて鮮風料理に妓生配して晚餐 土田麦僊¹⁵³来鮮の報ありて再び白雲荘に松岡 田邊氏等と杯を上ぐ 麦僊氏は妓生写生の来鮮の由

五月七日

鮮展会場に出掛ける 鑑査終了 陳列に着手 四君子に就て積極的整理をする ハコダ公園迂廻 再び塔を見る 四天王のレリーフ在 舍利塔高麗時代のものだけ何かびんと来る 寒水石塔の方はそれは特異性もあり洵に立派なれども李朝に降るので一寸甘さがある 併し釈迦一代記のレリーフは仲々精巧なり 昨日今日の疲労を医やし六時土田氏 田邊 松岡 有島氏等との千代本に於ける晚餐会に行く 数人の妓生を見る 豊田といふ人の案内にて東大門の側のスリチビ酒店見物 なら屋根の倭屋なり 細き小路の奥まりたるところにて尼寺の感じがある 朝鮮酒なめて見る 梅酒の様だ 想像していたものよりは清潔ではあるが満腹の折には手が出せない 何種類ものつまみもの異臭がある オンドル 円座 窓の絵草紙は色彩を添へる 緑青色に黒い模様のある襖筆筒 妓生と

146 松岡映丘

147 満谷国四郎

148 有島生馬

149 金嘉鎮(1846-1923)朝鮮の政治家。

150 佐々木京林(1897-1955)日本画家。小茂田青樹に師事。

151 加藤松林(1898-1983)在朝鮮の日本画家。

152 大館長節 日本画家。

153 土田麦僊(1887-1936)佐渡出身、京都の日本画家。

違った一種の野暮たさは土偶に近い 往來石がけの角に客引の青年が立ってゐる 之れは尚奥にあるところの魔くつへのである由 東大門上月が美しむ 自動車を行かせて遊廓見物極めて色彩的であり少女で仲々容貌美しいものだ とても盛んなる景況である 洵にせまいはん圍ではあるが アリアンカフェーに立寄る 之れは少しも面白くない 佐々木君の極に鳩の絵が壁面にあるのが興を引いたに過ぎぬ 今夜亦十二時を過ぎた
まつかり

五月八日

会場出張陳列終了 鑑査発表 民芸博物館見物 元図書館真後女官の居館慶殿でありしところ 菓童の談を聞く 童子の小便を湯煎にして夜つゆを屋上に於て受けそれを交りをした暁には王は必ずのむのだそうでその記録に依って王子の血なるやをたしかめらるゝのだそうで多少興奮剤の様であるそう 扇の二ツ合せて日傘になるもの その配色白群紅の二色により現在利用されそうなのである 背後の閔妃¹⁵⁴の殺されし跡をとらひ帰宿 七時政務總監主催明月館に於ける晚餐会出席 朝鮮料理を味ふ、鶯春殿四鼓舞僧舞等々古風なものも興深く鐘路の夜街散歩 帰宿

五月九日

益田といふ新義州の人の訪問に遇ふ 鮮展入選の人である 特選審査決定す 浅川¹⁵⁵氏の案内にて古紙及李朝の陶器四五求む 總督官邸に於ける晚餐会に出席 宇垣總督¹⁵⁶の温容に拝接 食後總督府創立の紀念の数点の絵画を観る 楓湖先生¹⁵⁷の伊賀の局 廣業¹⁵⁸の蘇東坡 玉堂¹⁵⁹の瀑布等佳品 牡丹、藤の花洵に美しく開花 本町通散歩 佐々木君に会し伴にホテルにて雑談にふける 満谷 有島両氏は金剛山に出発 満月に近き月明かなり サイレンのひゞき火災何れにかあらん

李朝瓶 皿二面四〇〇 水滴一〇〇 古銭十三・七〇

五月十日

金川¹⁶⁰未亡人拙作緑庭図持参 にじみに就て質問あり 小西英一氏¹⁶¹来訪 總督府博物館に小川氏¹⁶²をたづねる 土田氏 先來 共に楽浪の出土品二十四孝籠、硯箱、手筥 瑞鳳塚(慶州)発掘装身具の豪華に眼をうばわれ釜山近き梁山の図と対照して小川氏の説明得るところ甚だ多し 次いで本館出陳の李朝高麗新羅百済の陶磁、銅、器 装身具等々拝観 四時頃より大館、佐々木 弘井氏等と清涼里にドライブ 尼寺の趣き附近の閔妃の陵に訪て雅叙園に晚餐 加藤君來会 九時頃朝鮮貯銀行森悟一¹⁶³氏宅訪問 御収藏品絵画陶磁数多拝見 帰途朝鮮遊廓素見 ホテルに帰る

五月十一日

總督府博物館拝観 藤田¹⁶⁴小川氏等の好意に依りて秘蔵の瑞鳳塚を始め新羅の冠 楽浪の金帯、等々 別室にて中亜大谷師¹⁶⁵発掘のもの婦女騎馬像写生 午食後李王家博物館に出掛ける 小川氏加藤氏同行 高麗の陶磁に驚嘆 金剛如意輪 總督府のものとして何れかと嘆賞す 閉館時遅りよきなく退散 園中牡丹石階の両側に真盛也 ホテルにて小川 加藤氏会し晩食 十時廿五分発平壤に行かれる松岡氏見送り 加藤氏と朝鮮遊廓に行き一二写生す 満月をぼろなり

五月十二日

總督府博物館に加藤松林氏と会し佐世氏¹⁶⁶の案内にて勤政殿中双ゑい塚壁画模写 總督府食堂にて午食 次いで鮮展に行政務總監の來場あり 共に一巡 再び壁画模写後加藤氏の案内にて朝鮮富者の住居一見す 此の家は蘭史女史の姉の家とのこと 冷めんの御饗を受け夜は京城ホテルの總督府主催晚餐会出席 帰路道具や廻り カフェー二廻り帰宿泊一時半

154 閔妃(1851-1895)李氏朝鮮の第26代王・高宗の妃。乙未事変で暗殺された。

155 浅川伯教(1884-1964)朝鮮陶磁器の研究者。

156 宇垣一成(1868-1956)陸軍軍人、政治家。1936年まで朝鮮總督。

157 松本楓湖

158 寺崎廣業(1866-1919)日本画家。

159 川合玉堂(1873-1957)日本画家。東京美術学校教授。

160 金川廣吉(1888-?)朝鮮總督府判事、大邱地方法院部長。

161 小西英一(1896-?)京城帝国大学予科教授。

162 小川敬吉(1882-1950)朝鮮總督府技手(技官)。

163 森悟一 朝鮮貯蓄銀行頭取。

164 藤田亮策(1892-1960)京城帝国大学教授、朝鮮史編修委員、朝鮮宝物古蹟名勝天然記念物保存委員会委員。

165 大谷光瑞(1876-1948)浄土真宗本願寺派第22世法主。1902年から1914年にかけて中央アジアに學術探検隊を派遣した。

166 佐瀬直衛(1876-?)總督府博物館長。

五月十三日

李王家博物館 秘苑 王宮等平田氏の御案内にて拝観 田邊氏偶然会し加藤氏と三人にて終りに朝鮮産虎も見る 毛長く獅子の趣き多し 帰宿 荷物整理す 広井氏平林女史同行来ル 地図を求めに出て田邊氏に亦会し伴に岸の寮に晚餐をす 京城の暮色夜景美はし 三越によりヒルム入更へてもらふ 出発間近満谷 有島両氏金剛山より帰らる 午後十時二十五分発 諸君の見送りを受け一先平壤に向ふ 寝台車広きは宜し 唯柵のなきは不便

五月十四日

眼覚めて眺めた窓外の風景は赤い土に緑の草との美しき調和 黄州附近らしくおもふ 午前六時二〇分平壤着 ホテルの自働車にて平壤ホテル着 五号室に入る あいにくの雨 道庁学務課の水野¹⁶⁷といふ方來駕 直ちに図書館に行 平賀氏¹⁶⁸の案内にて同楼上楽浪出土品拝観 榎本¹⁶⁹小泉満君にも会し 新たに出てし傘の談あり 近來しきりに出土する高句麗の小仏像のテラコッタを摸す 午食水野と共にホテルにて為し橋都氏¹⁷⁰を訪つね同氏收藏の出土品数点拝観す わけて漢鏡の一つは人工と天然の妙との極地なるものあり 敬ふ 晩食后水野氏來り雑話 鮮人のしつね一なる感 且つて万宝山事件后に平壤に起りしを目標きして極めて感ぜし由

五月十五日

水野氏と共に大和町南門町見物 江西自働車発着所よりバスにて平壤出発 悪路動揺甚だし 十一時頃江西着 直ちに郡役所を訪つね三墓拝観の許可を受け一先旅館江西に入り午食 あいにく自働車無く金君の案内にて徒歩約一里 沿道暑熱炎暑の如し 三墓を望む風光たとへ難き趣在 中墓大墓の壁画豊麗なる彩色鮮かにやはり実物に接して始めて感ずるものなり わけて大墓玄武の一種 せい惨迄のうろほひは迫力大 迎ひに來た車一度返し七時頃迄玄室内の雰囲気にしたしむ 夜食後岡本幸一といふ人來訪在りて古墓発掘当初の談を聞く 腹痛あり稍悲観

江西行バス八五ヤン

拝観料一〇〇 自働車三〇〇 金君礼一〇〇

五月十六日

江西退去 昨夜腹痛身体疲労あり 予定を更へ真池洞のみにする 宿の払をすませ郵便局 岡本氏訪つね香芦を見せてもらふ 面白きもの也 九時発岐陽行バス(三十円)に乗る 江西の朝市に集る風俗とても工合宜し 岐陽にて汽車に乗換へ 午前九時五十六分発 真池洞駅下車 駐在所にて拝観の許可を得 子供の案内人と共に出掛ける 沿道の趣概深し 赭土の色 部落の点在 リンゴの白き花 黒い豚 丘上洵に宜きところに双楹塚は存せり セン道稍下部に斜め前室と玄室との間に二柱の柱存し素ばらしく美し をしむらくは脱落多きを残存の部分の巧は殊にその線条の本格的に朱彩之亦鮮麗なり 案内の子供に一円あたへ多少摸す 冷気はだにしみ腹痛の気味あり 一時四十八分発にて平壤に帰る ホテルに泊す 休養 晩食後散歩写真等求める 大同江畔に出づ 星月夜なり

五月十七日

水野氏の案内にて楽浪古墳 練光亭 大同門 乙密台 牡丹台 玄武門 箕子陵等見物 御牧の茶屋近く午食 妓生学校見物 合唱舞の予習 同行の見学の人に別れ水野氏と二人りて大同江に画舫を浮べ妓生同船詩情を味ふ 折柄柳絮舞ひ洵におあつらへ向き也 歸りて平壤キネマに涙の渡鳥を見物 再び長春館に食事 帰路妓生の宅一見 ホテルに帰ル

五月十八日

道庁を訪ひいとまをこふ 図書館楼上楽浪出土再び拝観 榎本 小泉 平賀氏等にも会し拓本をもらふ 午食そばにてすまし三時十八分発にて平壤に御別れ 橋都氏駅にあり博拝受す 開城着頃降雨益々はげしく岩見館に至るまで大雨を冒す 貧しき乍ら一浴 とまかく開城に落着く 蛙声屋外に烈し

五月十九日

開城見物 自働車を以て凡一時間半(四円)雨中昨夜来よりの印象悪しく開城の印象確たるものなく空し 博物館の高句麗陶磁 之れは格別 一時四十四分発汽動車にて京城に引上げる 先づホテルに入り三越に写真の為め直ちに行く 理髮ホテル階下にて為す 折柄東京より五月場所大相撲の中けいをラヂオが発声 加藤君に電話をかけ来てもらふ 伴に出て天

167 水野運七 朝鮮總督府の役人。

168 平賀藤吉 平壤府博物館職員。

169 榎本亀次郎(1901-1970)朝鮮總督府学務局宗務課長兼同總督府博物館勤務。

170 橋都芳樹 楽浪の発掘品のコレクションで知られる。

地に紙を求めに行く 土田氏に同所にて偶然会し雑談 ホテルに帰る 有島氏帰宿 面会 開城の十号の作品拝見する 雨にまたやまず 子供達の手紙受ける 今度の部屋は十二号

五月二十日

博物館に小川氏を訪ひ扶余等への御手配を乞ふ、次いで總督府に学務課局長を始め各位にいとまをする 加藤君の案内にて美術製作所にて筆 うち は 火はし 扇等求め亦丁字屋にて朝鮮服注文 さじ等求めてホテルに帰り愈々十二時四十分急行にて扶余に向ふ、土田 松田 加藤君等の御見送りを受けて大田にて乗換の間骨董店に二二求め論山にて下車 バスに乗り込む 数日來の雨にて不通箇所あり 江景を迂回す 然るに亦水害の箇所 冒険的に水中を前進 辛ほじて扶余に着せしは大分暗くなってゐた 松屋投宿 案外に宜き宿 食後大坂氏¹⁷¹郡庁の方々等來られ雑話 静かなる宿 気分も大分落ち着

五月二十一日

大阪氏の案内にて先づ百済王陵内壁画 平済塔 錦城中百済石仏見物 金採掘の山の峯を下れば小坂、高島両氏街道に待ち居られる 帰宿 午食後昨日車中にて偶然談話を交せし当地久住の田中氏¹⁷²約を履み機織の写生に誘はる 上記の方々と車をその村に進め写生す 終りて直ちに田中氏のみ別れ白馬江を舟にてさかのぼる 数日來の雨にて増水 釣籠巖は見えず 河水その辺うづを巻く 落花巖 汎泗楼(送日臺)を眺め皇蘭寺の下に船をすて同寺拝観す 建築物はさほどのものなけれど風鈴の音鮮人の雅宴台台上に開かれ詩を朗する亦楽しき様なり 落花巖上四囲の風光 快晴 千山連々として重畳 錦江の溶々たる流れ嘆賞すべし 汎泗楼 迎月台 軍倉址 博物館見物 帰宿 高島氏宅にて青磁一 鉢 油壺 茶碗 づら茶碗 高麗茶碗 十五円求める 晩食諸氏と共にす 田中 谷久保両氏に会し雑談 十一時に至る 高麗黄鳥さじ鳴く

五月二十二日

砧打の写生 大坂氏の仮寓にて為す 昨日の諸氏來会す 春窮四壁等の談興在 午後一時二十分発バスにて扶余出發 諸

氏の御見送りを受けて 論山大田大邸にては小倉氏¹⁷³代理大沢氏出迎下されたれど辞して直ちに慶州行午後九時廿七分着 朝日旅館に到着

五月二十三日

有光¹⁷⁴、崔¹⁷⁵両氏に面会 博物館一巡 午食後崔氏の案内にて先づ四面石仏 芬皇寺塔 皇龍寺址 雁鴨池 臨海殿址 月城 石氷庫 瞻星台 雞林 鮑石亭 三体石仏 武烈王陵 龜趺 金陽同龜趺等の古蹟と市の情景 校里の崔凌宅等見物 晩食は以上二氏と共に 終日愉快に過す 奉徳寺の大鐘のひゞきは雲の如し 月城見物后瓦の破片二個八十銭 二十銭求む

五月二十四日

午前十時卅分発仏国寺行有光氏の御案内を以て仏国寺駅着 自動車にて仏国寺着 直ちに拝観 多宝塔 無影塔 石階 極楽殿中釈迦像二軀 同ホテルにて午食 眺望絶佳 旅塵を忘る 夕陽を待ち四時頃吐含山に登山 予は二十六町強の山道なれば輿を用ゆ 山道仲々景趣深し 日本海に白帆俄かしめられる 石窟庵は東面して洋々たる青海を連山の彼方に眺め景勝の地をしめ亦数多の仏像の雄麗なる芸術予をして敬伏致さすにをかず 本尊背後十一面観音スケッチ致せども殆んど意を得ず 下山途中落日の壮観に接す 仏国寺ホテルの一夜亦宜し

五月二十五日

午前三時半吐含山再び登る 旭光の美観を味はんが為 予一人輿を籍り星斗さんらんたる裡にのぼる 石窟庵に至るころ 旭の光紅に空をそめ窟内に薄紅の空気流れ本尊いま正に生れんとする 趣き忘れ難し 十一面亦スケッチ致せども尚ものにならず 下山雲烟連山にたなびき朝の景趣亦一味在 朝食後仏国寺再び訪問 自動車の便を以て掛陵に行く 途中仏国寺駅々長の不可思議なる雅話を拝聴す 掛陵参拝后南山中腹釈迦像石仏礼拝 慶州に帰る 本日は大帝の日に相当致せば 有光、崔両君と見物 冠朝鮮服等求める 夜崔君衣服のことで見へられ同君と近くにて病氣平癒の祈願 巫女の舞見物す

171 大阪金太郎(1877-?)慶州分館館長。

172 田中遠吉 扶余在住。

173 小倉武之助(1870-1964)在朝鮮の実業家。朝鮮美術を収集。

174 有光教一(廣禮) (1907-2011)朝鮮総督府古蹟調査事務嘱託。のち朝鮮総督府学務局社会教育課古蹟係主任および朝鮮総督府博物館主任兼務。戦後、京都大学教授。高麗美術館研究所所長。

175 崔順鳳 慶州分館館員。戦後、国立博物館慶州別館館長。

五月二十六日

博物館へ出掛け安君の案内にて左教坊妓生学校見物 本日は臨海殿址に於て慰安会の様なもの催うす由 次いでそこに出掛ける 僧舞 酔体乱舞等々見物 帰宅 大坂氏来慶 夜分来られ有光氏等と雑話

五月二十七日

博物館を訪ふ 大坂氏より朝鮮服色考拝借す 崔氏の案内にて西岳のほとりに織機及び麦搗を写生 一農家にて午食の御もてなしを受ける 西岳書院見物 帰途朝鮮靴を求める 晚餐は大坂 有光 崔氏等と安東旅館に為す 銀珠氏の房にて生活の種々相を窺ふ 十一時半頃散会

五月二十八日

安東旅館に銀珠写生に出掛ける 有光、崔両君も共に 午食後北川のプランコ見物 併して晚餐は茂■閣にて有光、崔君並びに大坂氏と為す ともかく愉快に一夜を過ごす

五月二十九日

午前中荷物整理 大坂氏来訪 大邱伊達内務部長より依頼されたるとて画帖持参 之れは一先づ断る 同氏著書趣味の慶州及伝説の慶州贈らる 博物館参り一巡 東洋軒にて写真栗原にて瓦二、玉美、小壺(七円)求め帰宿 五時発釜山行バスにて(二元八十銭)有光、郡司氏等の御見送りを受けて愈々退慶 沿道の風景殊に慶州郊外とても宜し 彦陽梁山東萊を経て釜山着(約三時三十分)を費やし八時三十分頃着釜 途中運転手台にのせるのせぬで日鮮不和のこともあり 棧橋食堂にて晩食 十時出帆す 釜山港頭三日月かゝり燈火明滅美観

五月三十日

五時東天紅 日本の鳥々霞の裡旭日登る 雄大とは日はんよりは蓬萊の感じがする 船中朝食 午前七時殆んど正確に下関棧橋着船 九時発東京行急行迄下関街散歩 雲丹等求める やはり内地に帰って見ると如何にも物資が豊富だなと思はせる 九号十四寝台 沿道の景色白日下余り感興もなく大阪氏より寄せられたる趣味の慶州を読む 午食晩食食堂 車漸く吾が家に近づく

五月三十一日

午前八時三十分東京着 蒔田 岡本夫妻 高橋 忽那 金子

角田君等出迎へる 目黒一統皆無事 荷物種々整理 久闊ぶりに一家にて晚餐 上向、三上氏等来る

六月一日

やはり荷物整理等にて有耶無耶の裡に日を過ごす 清吉君に金城へ写真現像を依頼に行ってもらふ

六月二日

横山先生始め美校に田邊 松岡氏等に帰って来た挨拶に行く 先生は不在であったが美校にては他に川合 結城 平福 諸先生に面会の機会を得辞去 平福さんと目白迄同行 新宿に下車 小山兄訪問 帰途三越楼上にて朝鮮古壁画及鐘の本求め中村屋にてまんぢゅう等も求めて帰る 途中和子の帰りに遇ふ 幸三郎兄天明さん等と雑談 小谷津¹⁷⁶城東の方へ移られたので来る 福島氏作画希望を話しに来る 夜別宅兄と朝鮮の話がやっぱり今のところ中心になる

六月三日

終日朝鮮への礼状に過ごす 夜松山致芳¹⁷⁷といふ人の来訪あり 支那の種々談を聞く 写真の事にて弥気色を損ふ

六月四日

午前中礼状を描く 日曜なので弥生 和子を連れて返礼の買物に銀座に行く 新橋々上に見る落日の美観 伊東屋地階にて晩食 ネクタイ アルバム等求める 弥は朝子と岡本へ出かける

六月五日

礼状に半日を費やす 野莓の箱書をする 忽那君盲腸 庄司先生来診を乞ふ 看護婦をやとふ 高橋、桜井両氏作画督促に来る 小山 富取両兄と浜作に晩食 銀座散歩 武久君デッサン持参す

六月六日

終日謝礼のものの発送のことやら片付けごとにする 尚美堂主作画督促に来る 青柳氏林檎 天明氏朝顔それノゝ作品批評を乞はる 朝鮮服子供達に届く 小生も着し記念撮影

176 小谷津任牛(1901-1966)東京出身。小林古径に師事。1946年日本美術院同人。

177 松山致芳 日本画家。

六月七日

梅雨の気配 白金に草花を求める 萩原氏表装展の為に作画依頼に来る 長倉さん来りたるにて和楽へ行く 午後桔梗写生 何となく疲労あり

六月八日

桔梗の写生 ■山の森田氏満州国へ謝礼に贈るところの為に作画依頼に来る 藤井澄湖¹⁷⁸未亡人も同じく来る 村岡の紹介なり 三越綾部氏作品を取りに来る 朝顔図渡す 田中良助氏より画帖の謝儀五十円拝受 清水表展の作画督促旁々である 本月中旬頃までにとのこと 夜小林さん訪問 久し振りに快談に時を過ぐ 釈迦の教も風土から やはり結句生れ印度に於てこそ徹し得らるゝと森田氏は曰ふ むべなる言かな
 Sanskritの原書を八千巻寄贈されたるに対してゝある

六月九日

桔梗の下図どうも身体がつかれてゐるかぐうとこない 安堵¹⁷⁹氏木村先生¹⁸⁰の紹介にて画業修業に就て来訪 金子君に尺巾の絹を求めて来てもらふ 夜別宅の隆一 耕三¹⁸¹両君来り朝鮮談出づ

六月十日

桔梗図 本紙に着手 巾一尺立四尺 夜天明さんの画批評す

六月十一日

桔梗図作画 戸田栄次氏、中西氏作画督促に来訪 弥子供達と岡本へ出掛ける 高橋君夕刻来る 夜雑談 馬の話 李龍眠の五馬図賞す

六月十二日

桔梗図あらまし完成 不破祐正氏来訪 慶州石窟庵の話をする

る 関尚美堂夫人来る 絵画督促 ろく¹⁸²子供連で来る 女中風邪 弥為めに多忙
とも子曰ク 子供は泣くし女中はねるしあーあー うがちたる言か

六月十三日

常夏の花写生下図 朝鮮写生手入れ 岡本たけの¹⁸³さんみどり¹⁸⁴同伴来る 三越桜井氏朝顔の謝礼(三百円)持参来る 佐伯夫人弥太郎君嫁のことにて来り 江見の女中母共に来り 夜は尚美堂主桔梗図とりに来り 来客に多忙

六月十四日

常夏図本紙に着手 朝鮮写生手入れ 六月上旬期展出品の為に井上一郎氏作画希望断る 大山廣光氏来訪 雑談 慶州の話多し 夕刻夜にわたり明展観のじゅん備 仲¹⁸⁵ 西島 青柳氏外うちのものにて為す

六月十五日

午前八時會合 上半期情慕展を催うす 岡本夫婦 野村氏夫人令嬢 弥太郎君に配する話ありて誘ひ来る 三上夫人 玉川誠二郎君姉等々観者として来る 亦隆一君友人四五も参観あり 午後小林さん来訪等々にて作品批評は小生欠席す 併れども松山も新人出席大分宜き評ありしと 夜十時半散會す 忽那君病氣不参 横尾¹⁸⁶君所用 武久もと其他出席

六月十六日

大分疲労があり朝遅く起床 常夏の図作画 終日梅雨の趣き 深し 夜あんまをとる 小林¹⁸⁷ 吉田いそや¹⁸⁸氏和楽へ見へ出掛ける

六月十七日

常夏図作画 齋藤さん¹⁸⁹が徳寿宮美術館の出陳に就て来訪あり

178 藤井澄湖 日本画家。

179 安堵豊山 第13回日本美術院試作展(1923年)に初入選。

180 木村武山(1876-1942)日本画家。再興日本美術院の経営者同人。

181 吉田耕三(1915-2013)義兄吉田豊吉の息子。隆一の弟。

182 おろく 速水弥の乳姉妹。

183 岡本たけの 岡本英夫妻の近親者。

184 みどり 実妹輝子と北原大輔の娘。輝子没後、岡本麻子がひきとった。

185 仲博明

186 横尾木雞

187 小林古径

188 吉田五十八(1894-1974)建築家。小林古径邸が翌年1934年に完成する。

189 齋藤隆三(1875-1961)史学者。日本美術院の運営に携わる。

六月十八日

常夏図完成 昼顔の花写生す 上田子行君不相変作画境をひっさげ来る 苦言を呈す 角谷¹⁹⁰氏今秋開催展作画依頼に来る 寢室を更へる

六月十九日

あざみ写生下図 忽那君病状宜し 看護婦帰へる 夜幸三郎兄 天明さん等雑話 乾山花かごを賞す

六月廿日

あざみ本紙に着手 夕刻より弥生は歌舞伎に出掛けたので弥和子 朝子と渋谷齋徳寿しに立寄り碑文谷高橋君を訪ねる あいにく不在 祐天寺よりバスにて帰る 一郎留守中に来た由

六月二十一日

あざみ作画午後宮部氏令息告別式 青末寺に焼香 美術倶楽部に青々会拝見 田中良助 荒木十畝¹⁹¹氏等に会す 三越に龍子¹⁹²氏個展拝見 理髪 硝子器 ひがゐ、トゲ魚、藻等(六円八十銭)求めタクシーの便をかり下六番町有島¹⁹³氏訪問 六時松岡¹⁹⁴ 満谷¹⁹⁵、田邊¹⁹⁶氏等朝鮮一行合集 其他有島夫人 三条夫人等にて晚餐のおもてなしを受け食後収蔵の品々 拝見 十時三十分頃散会 午前中玉川の御伯母 神谷夫人来訪

六月二十二日

小雨 あざみ不備な点手入れ 田中■齋氏作画希望に来駕 金瘦信の護石馬の拓本拝受 三越より昨日の買物届く 牛田君来駕 朝鮮の話に花をさかせ武久君倉田氏所有のレコード分割の為め来り二十枚程選定求めることにする 弥は浅草へ出掛ける 太刀川氏作画督促に来る

六月二十三日

ひがゐの写生 武久君昨夜泊ったのでレコードの代金二十円今朝支払ふ 笹本さん来る 盲腸の疑ありて久しく臥床致されしと 藻魚図下図にかゝる 北原三佳氏作品頒布会に就て来訪 朝鮮の話は出て夜帰らる

六月二十四日

藻魚図本紙に着手 午後は三時より音羽護国寺に於ける弘法大師千百年遠忌に関する会に参席 室生寺住職 松岡¹⁹⁷ 結城¹⁹⁸ 正木¹⁹⁹等々の諸先輩に面接 ■■高楠両氏の話味あり 夜はゑびすの近くにかゝってゐる伊世川技芸団レビューに 弥、子供達と見物 笹本さん帰って来たら店の支払に就て来る

六月二十五日

藻魚図作画 青丘婦女抄小下図を練る 午後富取 佐々木²⁰⁰ 大館²⁰¹氏等来訪 晚餐を共に快談

六月二十六日

幸三郎兄奥多摩の景観を賞す 藻魚図完成 中西氏に渡す 藤森氏来訪 作画希望と義弟の画業指導を望まる

六月二十七日

びななかつら修飾の手伝をする 金地扇面に山百合作画着手 亦紅椿図の手入れ 田中良助氏代理にあざみ図渡す 夜は金子君の工場下図に批評す

六月二十八日

山百合あさがほの扇面画作 福島氏に常夏図を渡す 武久君に宋元名画集のうち漁夫図貸す 夜中央美術再刊に就て賛成を求めに内田氏来訪

190 角谷憲一 新画を扱う角谷二葉堂を経営。

191 荒木十畝(1872-1944)日本画家。

192 川端龍子(1885-1966)日本画家。1928年に日本美術院を脱退。翌年青龍社を設立する。

193 有島生馬

194 松岡映丘

195 満谷国四郎

196 田邊孝次

197 松岡映丘

198 結城素明(1875-1957)日本画家。東京美術学校教授。

199 正木直彦(1862-1940)1932年まで東京美術学校校長を務めた。

200 佐々木京林

201 大館長節

六月二十九日

山百合あさがほ扇面完成 小茂田君山手方面転居の通知を受く 伏原春芳堂鶯の箱書に来る 和子の誕生なので晚餐を賑やかにす

六月三十日

終日小山兄の来訪に遇ひて過ぐ 扇面百合如何も気にそます 一二作画しても見たが悪し 銀扇面に桔梗図描き出して見る

七月一日

扇面百合、桔梗画作 亀さん日除取付けにくる 午後研究会 十四名会し盛会 十時散会

七月二日

青丘婦女砧打ち図着手 夜武久君談話筆記来る 呼吸に就て話す

七月三日

砧打下図 高橋君乗馬試作持参 動作面白し 夜武久君別宅兄等来会 エッチングの話からレンブランドの偉大を賞す

七月四日

砧打、麦打下図 安堵君小下図持参 批評を乞ふ、夜清吉君に天平紙を買ひに行ってもらふ、天明さん来り画論あり 天平紙一枚十八銭

七月五日

青丘婦女の内機織かるぼう二図下図 高橋君来り隨身庭騎図巻貸す 弥吉田忠哉氏宅へ扇面あさがほ持参 昨年のモデルの礼の為め出掛ける 夜武久君天明さん等にて画論

七月六日

青丘婦女巻下図 中村豊²⁰²氏炎舞を平尾²⁰³氏より借りて来て呉れる 岡本麻 正同道 入原さん祝賀の為めの扇面百合とりに来る 弥太郎君丁度来合せ同君嫁の談あり 湯山氏夜梅の謝礼に来る(七十円)拜受 忽那君絵具を求め過ぎ幸三郎兄にをこられる

七月七日

青丘婦女下図 午後雷雨 弥 朝子と買物に出掛ける 夜月明かなり 幸三郎兄 別宅夫妻 隆一君 天明さん等会す

七月八日

青丘婦女下図 子供達けふにて第一学期了 暑中休暇 午後雷雨 夜忽那、越谷両君激れいをあたへる

七月九日

青丘婦女下図 原田絵絹店より二尺巾二十尺入手(代金十六円)夜河村良孝²⁰⁴ 武久 天明両氏等にて雑談 弥銀座に行く 除村氏美の国の人慶州の本を返しに来る 仲君中元に来る

七月十日

青丘婦女下図 吉田勇吉夫人来る 夜武久君口述筆記に来る 青柳君中元に来り会す 鶴心堂炎舞図をとりに来る 平尾家へ返却の為に

七月十一日

青丘婦女下図 夕食 幸三郎兄の誘ひにて千吉に益の助君弥と出掛ける 弥は松屋に吾々は高島屋に水墨展 資生堂に清水氏表展を見る 田町を迂回のコースにて帰る

七月十二日

弥 子供達とき²⁰⁵を伴に茅ヶ崎行 青丘婦女下図 松本真蔵氏子供を連れて中元に来る 安田未亡人逝去に就てなやむ話を聞く 玉川の伯母さんからの洋菓子に役に立つ 葵屋主人保険のことに来る 歌舞伎の切符を渡す 弥太郎君佐伯君²⁰⁶の南洋土産の土人の女木彫を届けてくれる 夜幸三郎兄 天明さんにて雑話

七月十三日

青丘婦女下図 トゲ魚遂に死す 中西氏藻魚図謝礼に百五十円来訪されたと面会失礼する 越谷君に粹とりにやる 夜安堵、西島、金子諸兄の下図批評す 十二時近し

202 中村豊 中村鶴心堂を経営。

203 平尾聚泉(1874-1943)二代目平尾贊平。実業家。

204 河村良孝(双舜)(1907-1959)小茂田青樹に師事。1932年日本美術院院友。

205 とき 速水家の女中。

206 佐伯永輔

七月十四日

青丘婦女下図 放光堂²⁰⁷来る 三十円渡す 高谷氏中元に来
高窪²⁰⁸氏も 夜小山兄犬の下図持参さる 天明 武久君等会
し雑話

七月十五日

午前中青丘婦女下図下図 午後研究会 松島画舫主芙蓉箱書依
頼旁々中元に来れども不面

七月十六日

絹張りやら掃除やらに過ごす 清吉兄帰国の途次立寄る 笹
本さん午食時に来る 夜御送り火 武久君来訪 談話筆記訂
正

七月十七日

午前中童妓図本紙にあたりを附す 午後茅ヶ崎行往途小茂田
君見舞に逗子桜山に不図山田²⁰⁹氏に会す 本日は心臓鼓動甚
しく且発熱状態悪し 次いで須賀医院に万端徹底せる談を求
めに立寄る 往診にて不在 後日を期し茅ヶ崎へ行 折柄伊
豆旅行の帰途別宅子供達来合せをりたり

七月十八日

大磯へ一同にて出掛ける 丁度祭礼に当り賑ふ、御輿の渡御
亦久方目の観物也 子供達を海水に浴せしめて小生は安田
氏²¹⁰訪問 朝鮮の話小茂田君の病気の談等ありて五時に駅に
家族のもの待合すので暇をつける 一日の行楽なり 暑くは
ありたれど

七月十九日

あはたゞしく茅ヶ崎を立ち逗子に須賀吉の助博士²¹¹訪問
病状をつぶさに聞く かなりの重患一月快癒期余後の不注意
は、今日をまねきし由 口頭結核に落ち入らざる様注意必要
なれば何しても左肺部は殆んど活力無く 唯案外に食欲のあ
ることは幸ひなる由 寔に困ることなり 帰宅 幸三郎兄に
報じ前後の所致を談す 田村一郎来る 長沢義郎先生中元に
来り暫時談 一郎と銀座に出て浜作に晩食 すだれ等求めて
帰る 不在中田中良助氏清水のあざみの謝礼に(七十五円)持
参 同じく清水氏箱書に亦中村氏三越あさがほの箱書に

電話逗子二一七 須賀吉の助博士逗子四五〇

七月二十日

牽牛花、薊、箱書 高橋君競馬小下図 寔に佳 河蝦を持参
早速硝子器に放つ 清し 素紙なり 童妓図線描に入る 藤
森氏弟君同行 写生拝見 洵に宜き天分を窺ふ 幸三郎兄に
桔梗図扇面渡す 松島といふ人息子に画業入門に就て来られ
し話を聞く 夜市川君来り養子云々に就て談あり 安堵君
カード下小下図持参 大分曙光を見うる 関尚美堂主桔梗の
礼に来る(二百五十円及浩祐氏作バンド狩狼犬拝受)

七月二十一日

童妓図着彩 夜武久君、青柳君茄子下図持参 評す

七月二十二日

童妓図改作 岡本へ弥太郎君嫁のことにて電話す 夜天明
武久両君来り俗歌の話 金子君点呼にて行く

七月二十三日

童妓図どうも工合悪し 亦改作だ 阿佐太子像を觀て益し自
分の拙さを思ふ 何と不明な頭かと お秋を宿入りにやって
けふは男世帯だ

七月二十四日

第三童妓図に着手 午後茅ヶ崎行 長岡といふ人から茅ヶ崎
の家のことにて電話あり 貸すことに定めた由 弥より話あ
り 夜海岸散歩 楽焼に興ず

七月二十五日

終日安息 午後六時四十四分にて茅ヶ崎引上げ ここ風の日
連続 隣の家貸した人々来る 品川下車 銀座千足屋楼上に
晩餐 和子亦自動車によぶ為めにまち／＼になる 防空演習
にて銀座街頭暗し

七月二十六日

童妓図画作 ためてあるので身心疲労す 蒸し暑さありてだ
るゐ 夜あんますして見る 桜井昌氏ひなんかつら表装の場
合彩色はく落のおそれありとて来る

207 放光堂 京都の絵具商。

208 高窪和吉 表具師。

209 山田直藏 小茂田青樹の後援者。

210 安田靫彦

211 小茂田青樹の主治医。

七月二十七日

多少の降雨を知る 童妓図未だつばに入らず 洗ふ とうもいかん 夕刻酒井福次氏来訪 次いで西島君の婦女図を評す

七月二十八日

童妓図画作続ける 高谷氏花あやめ謝礼(百五十円)に来 今秋十日十五日頃開催の展覧に作画希望をのべる 加藤勝蔵氏久方振りに来る 次いで山口林治²¹²氏来訪 まり藻の話を聞く 朝子発熱七度八分気づかはし

七月二十九日

童妓図大体成る 夜天明、武久、青柳君等来る 青柳君茄子下図持参 清吉、忽那両君の下図も評す

七月三十日

童妓図亦失敗か 夜吉田勝彦君日浴図 西島君樹陰の下図評す

七月三十一日

童妓図更生の為め附近の少女に来てもらって写生等して見る 何にしてもうまく行かない

八月一日

童妓図第四作目に着手 子供達幸三郎兄に中元をもらって欣ぶ 忽那君絹求めることにて不相変苦言 夜別宅に一家アイスクリームの接待を受く 桔梗図箱書をする 扇面

八月二日

童妓図今度はとうにか成りそうである 小生誕生日に当るので子供達の献立にて御馳走である 田村²¹³義足修理成る 十八円支払ふ 夜管燈予習 桜庭先生来る

八月三日

童妓図どうやらまとめることが出来た 高橋君来る 高島屋藻魚図箱書を為す 弥岡本へ弥太郎君の嫁のことにて行く 夜理髪 洋楽のチクオンキに興ず 武久君作画の室のことにて来る

八月四日

機織女の方にかゝる 暑さ革る 童妓亦手を入れねばならな

い うんと青衣にして見る

八月五日

機織女前進 童妓部分洗ふ、やっぱり青色強度である 天明さんから一燈園の話を聞く 西島君下図持参 弥生自由ヶ丘へ行

八月六日

童妓、織女伴に失敗に帰す 亦出直しせねばならない 葵屋の姉弥生を送って来旁々来る 越谷君百合下図評す

八月七日

どうさの引方をろそかの為め張更へた絹はがれてゐる 清吉しっせきす 織女其他下図不備の箇所手入れ 忽那君水魚下図評す 武久君モデルにて作画に入る

八月八日

織女、童妓両図本紙に着手 夜武久君下図カフエーの夜持参す

八月九日

織女前進 本日より防空演習始まる 非常管制のサイレンの鳴ひゝき或る一しゅんの感じあり

八月十日

防空飛行器の爆音はしばし、天空を眺めさずには置かない 蠅蝸図線描 夜は燈火管制見物に幸三郎兄 和楽母と秋葉原駅へ出掛ける 十二時近く帰

八月十一日

夜来より今晩にかけて防空演習見物 蠅蝸着彩 弥太郎君嫁のことにて帝国興信の調書は□□□□の箇所あり 一頓挫の出来事生ず 熱海に電話したり夜佐伯夫人等来会したり こまったことになる 市川君小林姓に変わるについて来る 武久君下図批評

八月十二日

織女蠅蝸作画進捗 弥太郎君結婚中止のことにて岡本に来郎を乞ふ、美の国大山氏写真師君と来たが撮影を辞す 寺内²¹⁴氏より院義務作展黄蜀葵の箱書に来る 夜天明さん見へる

212 山口林治 浮世絵研究者、評論家。

213 田村耕郎 御舟の義足のメンテナンスを担当している。田村式義手足製作所を経営。

八月十三日

織女概略完成 岡本例の談にて来訪 次いで野村氏訪問 遂に解消と決定す 夜安堵氏銀座裏街の下図持参す 武久君下図完成した様なり

八月十四日

蝸蝓作画 上田晴風君来訪 午後三時頃より弥と神宮プールに全日本選手権水上競技見物に出掛ける 帰途益の助君と共に新宿に出て不二家にて晚餐

八月十五日

蝸蝓作画 松坂屋安藤、森両氏今秋展観に就て来訪 安堵氏ガード下の作品持参 批評を乞ふ 夜高橋夫妻来り幸三郎兄等一家皆にて輪投げの競技に興ず 武久君モデルのことに問題生ず

八月十六日

蝸蝓あらまし完成に近く 日々の人が弥に談を聞きに来る 佐伯家の人々来る 忽那君の下図を見る

八月十七日

砧打図に着手 夜安堵君着彩のことにて来る 武久君塔影掲載の談話²¹⁵を筆記に来る 忽那君下図持参激れみする

八月十八日

砧打図作画前進 弥は子供達を連れて九品仏二十五菩薩面かぶり見物に行く 夜武久君談話筆記に來られたがまとまらずに了る

八月十九日

砧打図作画を進める 忽那君絹求めるに就て弥と談す 笹岡正民君の訃報に接し意外 夜悔みに行く(十円香料)腸チブスの由 愁傷の至りに不堪 小山君と会し銀座散歩 太田耕治 川崎小虎²¹⁶氏等に偶ふ 小茂田君の病状稍々快し由

八月二十日

砧打図作画 中村豊氏 藤森氏同道来訪 今秋展観に就て笹岡家告別式 金子君に代理依頼 夕刻小林さん見へる 直ちに帰らる 明日棟上げである由 吉田磯也²¹⁷氏見へてゐるとのこと 和楽に会す 武久君に活殺に就て談す 青柳君茄子図持参批評を乞ふ 腹具合悪くつかれる

八月二十一日

砧打図作画連続 土井撰美堂よりの木瓜図箱書をする 夜広瀬氏朝鮮の談話を聞きに来る

八月二十二日

砧打図あらまし完成 穀搗図に着手 大山氏撮影に來たが謝絶す 夕刻中西氏作画依頼に来る 亦美術日報の人作品寄贈に就いて來たが之亦謝絶す 夜食後散歩 一家そろって本宅に正五郎君を訪つねる

八月二十三日

穀搗図作画 朝日より電話 未完成に就き撮影断る 弥、岡本へ佐伯夫人と行く 弥太郎君の礼の爲め 夜除村君青年作家動向に就て談²¹⁸を聞きに来る

八月二十四日

穀搗図前進 夕方除村君昨日の談話校正を求めに来る 関尚美堂主桔梗の箱書に来る 安堵君もたづねて来る

八月二十五日

穀搗図作画 安堵君ネオン、カード下二図作品持参 批評を求む 夕刻如来翁来り五円渡す 車中にて紙入ふん失せし由 小山君来る 大作せんことを約す 弥生神奈川に行く 観艦式の爲め 弥昨夜来下痢 嘔吐 庄司先生の来診を乞ふ

八月二十六日

穀搗図作画 あらまし為す 帝劇に海底見物 和子朝子を連れて行く かえってきたら田中²¹⁹ 半田²²⁰ 鈴木²²¹三君小

214 寺内新太郎(1898-?)父の寺内銀次郎とともに寺内遊心堂を経営。日本美術院の仕事も多く引き受けた。

215 速水御舟「想片」『塔影』9巻8号(1933年8月)p.45

216 川崎小虎(1886-1977)日本画家。

217 吉田五十八

218 速水御舟「日本美術院と青年作家」『美之國』9巻9号(1933年9月)p.75

219 田中文雄(青坪)(1903-1994)群馬県出身。小茂田青樹に師事。1932年日本美術院同人。

220 半田鶴一

221 鈴木麻古等(1901-?)東京出身。小茂田青樹に師事。1939年日本美術院院友。

茂田君の危急をつけに来てゐた 幸三郎兄来合せ■談あり
十二時に近し

八月二十七日

逗子に電話す 須賀博士の言危急を告ぐ よりて小生先づ出掛ける 婦人看護婦の言亦同様 博士を訪問 一層その感を加ふ 直ちに目黒へ電話して幸三郎兄等の来返を乞ふ 所々発電 皆集まる 幸ひ小康を得たる気味 よりて幸三郎兄と小生十時五十九分にて帰東す

八月二十八日

童妓図に着手 午後逗子より電話 小茂田君りん終の報 直ちに幸三郎兄と出掛ける 早や逝去午後四時四十分 吾が友終に行く 不可解なる気持に捕はる 牛田 小山氏の他来り悔む 十二時納棺通夜

八月二十九日

五時十三分逗子発帰東 牛田 小山二君は全生庵へ告別式のことにて行く 小生連日の睡眠不足 午前中休養す 玉川誠二郎君、西島、武久、高橋 青柳諸君自作持参最後のふんばり忙し 不相変桑名氏の梓張夜に入り始まる 牛田 小山二君帰り■■作画まん評 七條君も見へる 中村豊君小生梓張に就来る 幸三郎兄は逗子行 小生香奠二十円と供物 幸三郎兄にもって行つもらふ

八月三十日

青丘婦女抄全作にわたりにて手を入れる 小茂田君逝去のことにて田中良助、村田徳治氏等より電話あり 朝日拙作撮影に来る 夕刻小山 富取両君鑑査後来り余り成績不良を告ぐ 夜牛田君来り 回こ談によるを更す

八月三十一日

青丘婦女抄完成 夕刻富取 小山両君院鑑査終了して来る 関係出品殆んど落選 幸三郎兄等と晚餐共に雑談

九月一日

小林さん来訪 小茂田君弔慰のことに就ての談 切削に評語を賜る 田中君次いて来訪 同じく小茂田君の前後の所致に就て幸三郎兄等議す 当日は研究例会なれども童妓図不備の点あり 夕刻迄やる 弥は逗子へ幸三郎兄別宅姉と出掛ける 夜は例会講話 支那遊行松山氏の談に更ける 越谷君に中村鶴心堂へ拙作を届ける

九月二日

小茂田君生前並びに遺族に就て御厚意を謝す為め先生訪問 共に会場に行く 東京駅にて理髮 丸ビル散歩 全生庵に幸三郎兄小山君と会し明後日告別式の手はずをする 帰宅 玉川の伯父さん来訪さる □□□□なるや稍々気にかゝる

九月三日

高橋君来る 幸三郎兄と三人にて美術院招待に出掛ける 遠入²²² 田中 幸三郎兄と精養軒に午食 小茂田家の将来に就て相談する 夜武久君 小茂田君の談²²³を聞きに来る 川上さん来訪

九月四日

小茂田君の告別式 夜来の風雨気つかはしたれど幸ひ好晴に恵まる 全生庵に施行 戒名談窓院茂林青樹居士行年四十三。昭和八年八月二十八日 午後四時四十分歿 導師偈曰く 除[徐]行踏断流水声縦出写飛燕跡 カツ 院同人を始め焼香者三百六十名 殊の外に盛葬也 幸三郎兄 田中文雄君 小生にて遺族の代表の方に今後所致に就て大雅あと判等の引例を以て制作品の散逸のなからん様注意す 夜黒田²²⁴、鈴木麻古等 松永²²⁵君等拙宅に来り是迄の清算香典約一千一百円 使途万端約五百円弱

九月五日

村田²²⁶ 横尾²²⁷ 若山²²⁸ 石本²²⁹君等来り会し絵画談 アトリエ社小茂田君の談²³⁰を聞きに来る 夜鈴木麻古等君小茂田君の保険証券持参 逗子の帰途寄る 太田耕治氏帝国美術学

222 遠入巽 小茂田青樹の後援者。

223 速水御舟「噫！小茂田君」『塔影』9巻8号(1933年10月)pp.55-56

224 黒田古郷

225 松永成路(1895-?)長野県出身。小茂田青樹に師事。1932年日本美術院院友。

226 村田泥牛

227 横尾木雞

228 若山菊次郎

229 石本光太郎

230 速水御舟「畏友小茂田君」『アトリエ』10巻10号(1933年10月)p.25

院追悼会のことにて来る 中島菜刀²³¹君帰郷の途来る

行く 夜小茂田君遺作しらべ

九月六日

岩佐新²³²氏来り美術新論掲載ノ作家言²³³、小茂田君のこと²³⁴拙作の因²³⁵等談話 武久君小茂田塔影上談 幸三郎兄と小茂田君の遺作検べ 小林夫人来訪 川上五郎氏晩食を共に朝鮮の話 藤森氏之亦小茂田君の談²³⁶を聞きに来る 鈴木麻古等、大麻²³⁷両君逗子引上に就て相談に来る

九月七日

書籍整理に終日 根岸鉄太郎²³⁸氏拙作椿花るり鳥図はく落の箇所修補を求めに来る

九月八日

高句麗壁画模写 小茂田君の川越兄²³⁹氏和楽へ来る 将来の相談 近藤さん保険のことにて来る 富取君神崎²⁴⁰氏見へ晩餐を共に画を談ず 田中²⁴¹君来る 明逗子行を約す

九月九日

内真²⁴²氏東上致されし由にて北大路²⁴³氏の招致にて同氏鎌倉の別業へ幸三郎兄と出掛ける 次いで逗子へ小茂田君遺品整理のめめ行き十三時過ぎ帰宅す

九月十日

高句麗壁画模写 田中良助氏秋の展観作画に就て午後除村氏小茂田君の談²⁴⁴を聞きに来る 高橋君院二科見に弥生を誘ひ

九月十一日

高句麗壁画模写 朱華瑠璃鳥のはく落修補及箱書を為す 村越附近出火 十一時火焰のもう盛見物 岩佐氏小茂田君の写真のことにて夕方来る 夜子供達と火事跡から目黒駅近く散歩 カフェー何日の間にか増加に驚く 清吉²⁴⁵ 有明²⁴⁶両君に今後の方針に就て談す

九月十二日

高句麗壁画模写了る 田村彩天²⁴⁷君告別式 忽那君に代理焼香をたのむ 近藤さん小茂田君の保険 茂・茂吉訂正に就て来る ハツ井²⁴⁸、坊坂²⁴⁹二君本日逗子に引上通告のめめ来る 持ち合せの小茂田君写真岩佐氏宛送る 夜天明 青柳二君と雑話 弥子供達歌舞伎見物 細雨秋冷を誘ふ 田中君からも引移の電話あり

九月十三日

小林さん来訪 原石と宝石との例を引ひて芸術画作道程の話は的確なるものであり意義深い 午食を伴にす 川越小茂田君兄 未亡人²⁵⁰ 仲子氏挨拶に来る 東京仮寓のことに就て杉並区西田町一ノ六九七 夕刻頃まで雑談 飯島南風²⁵¹氏に返事を出す 高島屋中西氏 牧野氏同道作画依頼に来る

九月十四日

近藤さんより小茂田君の保険一七七五円受領 河村²⁵²君来る

231 中島菜刀(1902-1955)鳥取県出身。1929年再興院展初入選。

232 岩佐新 雑誌記者、編集者。

233 速水御舟「作家言」『美術新論』8巻10号(1933年10月)口絵裏

234 安田靉彦・速水御舟「故小茂田青樹氏追悼」『美術新論』8巻10号(1933年10月)p.92

235 速水御舟「私の出品作・院展」『美術新論』8巻10号(1933年10月)pp.36-37

236 速水御舟「亡き小茂田君の事」『美術評論』院展号(1933年10月)pp.30-32

237 鈴木大麻(1901-1975)三重県出身。小茂田青樹に師事。1929年日本美術院院友。

238 根岸鉄太郎 表具師。都表具根岸を経営。

239 小島新吉(1888-1949)

240 神崎憲一 美術評論家。『塔影』美術顧問。

241 田中文雄(青坪)

242 内貴清兵衛(1878-1955)京都の実業家。北大路魯山人等のパトロン。

243 北大路魯山人(1883-1959)陶芸家。書家。

244 速水御舟「小茂田君のこと」『美之國』9巻10号(1933年10月)p.136

245 角田清吉

246 忽那有明

247 田村彩天(1889-1933)日本画家。

248 ハツ井舜圭 東京出身。小茂田青樹に師事。1937年日本美術院院友。

249 坊坂俊明(俊文明) (1912-1993)富山県出身。小茂田青樹、のち小林古径に師事。1948年日本美術院院友。

250 小茂田ハナ 仲子は長女。

251 飯島南風 大成美術通信社代表。

荻窪引移りに就ての費用受取りにて午後小山²⁵³氏訪問 あいにく不在 大智²⁵⁴氏 山本²⁵⁵氏 橋本静水²⁵⁶氏訪づれ小茂田君遺族後援依頼の為に 夜松山²⁵⁷君揚州の下図持参 小山君来り幸三郎兄の帰宅を待ちて帝国美術学校贈呈の花輪のことを定める

九月十五日

小茂田君の同情会の為め依頼に木村²⁵⁸、藤井²⁵⁹、真道²⁶⁰、酒井²⁶¹、長野²⁶²、平櫛²⁶³ 吉田白嶺²⁶⁴氏等訪問 午後二時院に於ける王陽明の話公田連太郎²⁶⁵博士の講話を聞く 王陽明の聖賢への求道心のしれつとあくまで人間的な人格の偉大さに敬伏する 無意義なる言の不用 曲文に徒らにかけりて貴重な生を弄費するの悔 先知の境遇をは握してこれを超越する気魄 落第をはじつ心の平かならざりしをはづること 父母を思ふ人間本性を悟る等々実に敬ふ可き言多々 帰路安田²⁶⁶小林²⁶⁷両君を資生堂に休み交話す

九月十六日

奥村²⁶⁸、橋本永²⁶⁹、筆谷²⁷⁰さん等訪問 小茂田君遺族同情の

ことを依頼 次みて帝国美術学校追悼会に出席 北²⁷¹校長を始め川崎²⁷² 山口²⁷³ 牧野²⁷⁴、佐々木大樹²⁷⁵氏等 吾々達は安田さんを始め富取 小山 郷倉 田中君等 式後親自荘とか附近の料亭にて太田耕治氏の包丁にて晚餐の御厚饗にあづかる 武田師も加はってゐる 同師の一種風格は珍らし 帰宅後長茶亭に河村 松坂²⁷⁶両君 その後の制理のことにて来てゐるので出掛ける 前途仲々多難に思やられる

九月十七日

美術院会場に行く 小茂田君作品年代しらべ 斎藤²⁷⁷さん木村さん等から遺作展催行のことの談ある 午後研究会 武久君に読売紙上への談²⁷⁸をする

九月十八日

午後石井²⁷⁹さんを訪問 面談偽りなき談は益甚大 新海²⁸⁰氏 堅山²⁸¹氏 大内²⁸²氏等訪問 凡て小茂田君のことにて大内さんには帰途²⁸³上にて談す 宇都の宮より御ゆきと一人の女中 上京 午前中戸田 不在中湯山作画依頼にて来る

252 河村良孝

253 小山大月

254 大智勝観(1882-1958) 1914年日本美術院同人。

255 山本豊市(1899-1987)彫刻家。1932年日本美術院同人。

256 橋本静水(1976-1943)1916年日本美術院同人。

257 松山致芳

258 木村武山

259 藤井浩佑(1882-1958)彫刻家。1916年日本美術院同人。

260 真道黎明(1897-1978) 1921年日本美術院同人。

261 酒井三良(1897-1969)1926年日本美術院同人。

262 長野草風(1885-1949)1916年日本美術院同人。

263 平櫛田中(1872-1979)彫刻家。1914年日本美術院同人。

264 吉田白嶺(1871-1942)彫刻家。1914年日本美術院同人。

265 公田連太郎(1874-1963)漢学者。

266 安田鞞彦

267 小林古径

268 奥村土牛(1889-1990)1923年日本美術院同人。

269 橋本永邦(1886-1944)1921年日本美術院同人。

270 筆谷等観(1875-1950)1916年日本美術院同人。

271 北哈吉(1885-1961)帝国美術学校創立者。

272 川崎小虎 帝国美術学校教授。

273 山口蓬春(1893-1971)日本画家。帝国美術学校教授。

274 牧野虎雄 帝国美術学校教授。

275 佐々木大樹(1889-1978)彫刻家。帝国美術学校教授。

276 松坂冬佐(1901-1978)小茂田青樹に師事。

277 齋藤隆三

278 速水御舟「<作者の意図>静かに楽しむ」『讀賣新聞』1933年9月21日

279 石井鶴三(1987-1973)彫刻家。1916年日本美術院同人。

280 新海竹蔵(1997-1968)彫刻家。1927年日本美術院同人。

281 堅山南風(1887-1980)1924年日本美術院同人。

282 大内青圃(1898-1981)彫刻家。1927年日本美術院同人。

九月十九日

千とせ船橋に木村²⁸³さんを小田原に牧²⁸⁴さん大磯に溝上²⁸⁵さん安田²⁸⁶さんを訪問 木村さんとこの御茶の味 牧さんところでは極木といふ人に会す 同氏は安田さん等の知人でもある由 牧さんのいふせきには感じ深し あざと間違へられて大変溝上さんのところへ行くのにむだをした 安田さんところで不相変晩食のおもてなしを受く 元窯の緑釉の美しさを知る

ゾミといふ不思議なものの黄色は味ひがある 大阪に多き由 蘇芳は煮出してみょうばんを入れて始めて色が出る

九月二十日

七條²⁸⁷さん幸三郎兄と遺作集の相談 喜多²⁸⁸氏を訪問 凡てを根本を中心とする同氏の談益あり 祖々父は武清であらるゝ由 辞して武井²⁸⁹氏訪ねたれど不在 鶴見に歩の延ばし 前田²⁹⁰氏訪問 かぶとの写生等拝観 晩食のをもてなしを受ける 帰途山村²⁹¹氏訪問する 朝子風邪の気味多し 漸く秋冷を加ふ

九月二十一日

佐藤朝山²⁹²氏訪問 同氏のよく酔ひよく覚むるの心境教はるゝところ多し 逗子中村²⁹³君訪問 午食のおもてなし 支那写生拝見 渋谷に歩を進長郷倉²⁹⁴君を訪ね晩餐の御もてなしを受く 故紫紅²⁹⁵氏の想出等二雑話にふける 不在中太田耕治 小林巢居²⁹⁶氏来られしと

九月二十二日

高橋君来る 午後小茂田君移居訪問 前後の相談を夫人 川越兄 幸三郎兄 田中君等とする 杉青会²⁹⁷門弟等への遺作振り宛等々 黒田君の宅立寄り幸三郎兄と新宿三徳及びすし

やに寄り帰宅 不在中橋本秀二郎君 武久、高田君等見えた由

九月二十三日

柘榴果子図下図に着手 松坂屋森氏督促に来る 弥生は日比谷公会堂に行く 夕刻太田君 横手君画道入門に就て栗原氏等と来る 横手君は川端学校生である 河村良孝君等と知る由 武久君来る 広瀬氏の稿手入れ

九月二十四日

柘榴果子図に着手 藤森氏作画を促しに来る 夜武久君と朝鮮記行稿本を練る 広瀬氏原稿 松坂屋森君来る やはり作画督促

九月二十五日

柘榴果子図画作 省線に投身自殺者を見る 日々の高原氏帝展批評を求めに来る 謝絶す 村上敬一氏の弟来れど不会橋本秀二郎氏画作督促に来る 夜安堵氏来る

九月二十六日

柘榴果子図画作 午後印に公田先生の王陽明の談を聞く 了りて会場に立寄り浜町富久家に遠入さん幸三郎兄と会す 帰宅 武久君待ちをり朝鮮行の稿訂正する 久方めに出生茅町附近を巡る すっかり変遷して一向に不明

九月二十七日

柘榴果子図作画 夜牛田 富取 小山 黒田 幸三郎兄と小茂田君遺作集編集に付いて交談す

283 木村五郎(1899-1935)彫刻家。1927年日本美術院同人。

284 牧雅雄(1987-1935)彫刻家。1927年日本美術院同人。

285 溝上(小倉)遊亀(1895-2000)1932年日本美術院同人。

286 安田鞞彦

287 七條憲三

288 喜多武二郎(1897-1970)彫刻家。1927年日本美術院同人。

289 武井直也(1893-1940)彫刻家。1929年日本美術院同人。

290 前田青邨(1885-1977)1914年日本美術院同人。

291 山村耕花(1885-1942)1916年日本美術院同人。

292 佐藤朝山(1888-1963)彫刻家。1915年日本美術院同人。

293 中村岳陵(1890-1969)1915年日本美術院同人。

294 郷倉千鞞

295 今村紫紅

296 小林巢居(1897-1978)1931年日本美術院院友。1937年脱退。

297 杉青会 1931年に小茂田青樹門下で結成された賛助員会。

九月二十八日

紫陽花図を高窪依頼 奥村氏の画帖用に描き出す 夕刻読売
東林氏挿画のことにて来る 謝絶する 晩食を共に富田さん
を中心に話題は近時の画界に及ぶ

九月二十九日

紫陽花作画 午後院当番 二科観る 安井²⁹⁸氏の作品抜けて
ゐるし生きてるんだといふことが観者を動かす 奥入瀬の水
は霧々と音を立てゝゐる 他の作品はそれを観ては啞者の感
を覚へさせられる 山本さんに院彫刻の話を一々に付いて拝
聴することは洵に益が多くあった 弥 和子を連れて来た
伴に精養軒に軽い食事 銀座散歩

九月三十日

紫陽花作画 夜青樹画集寸法を一々定めるので和楽に幸三郎
と為す 富取君来り会す 豊田²⁹⁹君より仇討輪廻贈呈を受く

十月一日

紫陽花完成 午後研究例会 野外にてデッサンを試見る 量
感を主とす 併し未だ意に満たず 安田さんより速達を受く
青樹遺作展に就てゝゝある 岡本の子供達来る

十月二日

青柳さんの無花果を写生に行く 別宅の親類の娘さんモデル
になって呉れるので来る 二十日を約す 午後無花果下図
夜永峯の祭礼に一家で見物 しばらくぶりに神楽を観る 空
地で東京音頭を盛んにやってゐる まるで盆踊の気分だ

十月三日

無花果下図 午後院へ公田博士王陽明学聴く 帰途小林さん
と資生堂に晩餐 近世絵画談に熱す 帰宅 太田耕治氏亦々
帝国美術校先生問題にて来てゐる 幸三郎兄沼津より持ち来
りたる青樹君作品を掲げ観賞す 不在中高窪君来りしと

十月四日

高窪氏 奥村氏画帖紫陽花に就て謝儀百円持参さる 内五十

円同氏にやる 小山君来る 共に院に出掛ける 青樹遺作展
に就て相談 結句本院にて開くことになる 帰するところに
帰すといふものか 帰途偶々七條 梁の二君に会し博物館に
久能寺経を小林 小山兄等と拝観 二巻見るべきものあり
紫色の霞の如き彩寔に美はし 銀座コロパンに小憩 帰宅
夜食後余りに月明かなれば家族一同散歩 大島神社附近迄行
人坂一体面目一新 一瞥の価あり

十月五日

川越小茂田君兄来訪 午後大磯安田さんを訪ぬ 遺作展開催
決定の礼にて 白木屋楼上に於ける扇面展観る 光琳兎図観
る可きもののみ 夜食後横手君十大弟子デッサン持参 絵談
を交ゆ 弥小林さんへ瓦を持って行き平常の無沙汰を謝す
三溪先生より白雲洞への招きの状拝受す

十月六日

無花果図本紙に着手 午後荻窪小茂田家へ出張 写真撮影と
写生作品制理 次みて山田³⁰⁰さん訪問 杉青会へ対する了解
を得 同氏所蔵品数多拝見す 秋雨立籠め静かなる夜 不在
中松坂屋森君に來りし由 柘榴図渡せしと

十月七日

無花果図作画 夜帝劇映画見物 弥 子供達丁度満津³⁰¹も来
てゐて共に出掛ける モナリザの失踪近来になく面白く見る

十月八日

無花果作画 青空の部分試みる 天明さん小林さんの作品完
成持参して見せて呉れる しほん図である 筆谷さん水口薇
陽³⁰²氏娘さん画道志望に依りて同伴さる 夜青樹君遺作に就
て幸三郎兄と振当あんばいをする
満津子のことであざ子来る。■君キブスに懸かるとの悲報

十月九日

三溪先生の御招きにて強羅白雲洞に行く 小林³⁰³さんあいに
く不例 安田 前田 川面³⁰⁴氏等にて夜十二時近く迄雑談
九時過ぐる頃強震あり

298 安井曾太郎

299 豊田豊

300 山田直蔵

301 岡本満津子 実妹麻子の娘。

302 水口薇陽(1873-1940)俳優。日本映画俳優学校設立。

303 小林古径

304 川面義雄

十月十日

十一時過ぐる頃下山 白雲洞清境より俗じんの巷に入る 小林さんの病を見舞ふ 帰宅せば中川重太郎氏 青樹君遺作内貴³⁰⁵氏分持参 帰りを待ってゐらる 天明さん見へ茶の話

十月十一日

佐伯³⁰⁶君ノ海の生命線を邦楽座に観る 弥と上野に光悦宗達光琳の展観を拝観 根津氏³⁰⁷蔵草花宗達筆 虚実の妙敬ふ可し 中食にしたる安ランチしきりに腹痛を覚へ耐へ難し 急きょ帰宅 臥床 夕刻約を履まれ郷倉君 太田君同伴例の学校問題にて来る 同氏しゅう任され先づすむや宜し

十月十二日

秋雨陰うつ 無花果図を進める 君子は和して同しからず 小人は同じくして和せず 孔子言感動す 夜青樹画集あんばいをする 田中³⁰⁸君 植木³⁰⁹さんの作品に就て来る

十月十三日

無花果図画作 小茂田君作品撮影のことあり 次いで夜七條牛田 河村君等来合せ青樹遺作に就て懐かしむ 牛田君振分髪持参 市川君来て泊るる由

十月十四日

無花果作画に終日親しむ 夜天明さんやって来る

十月十五日

無花果完成 院に王陽明学を聴く 帰途小林 小山両兄と銀座に立寄る 帰宅 水口氏作品持参 待ち居る

十月十六日

研究会 裸体写生 黒田君 小茂田遺作集の基金に対する画作持参さる

十月十七日

三溪先生の招きに応じ九時五分東京発にて小林 川面両氏と強羅白雲洞に行く 前回小林さん病の為に不参なれば同君を

主としての今回の催うし也 神嘗祭快晴佳き日也 不二の秀嶺新雪に映へ美し 不染庵に於て茶 三溪先生 夫人 西郷夫人³¹⁰ 小林 川面両兄 夜は古径論いさゝか所懐を述ぶ 興奮十一時を過ぐ 今回は茶室の方に静寂を味ひ就寝の恵みを得たり

十月十八日

三溪先生、婦人 西郷夫人、小林 川面 小生六名の一行にて箱根の秋色を賞す 去来山房往時をなつかしむを始め前田氏推賞の石地蔵尊の検討 二十五菩薩 北宋時代の之れは稍見る可きもの 興福院の文殊 千手観音 権現の万巻上人 弘仁時代の像は断然ぬきんでたるもの 権現由来の画卷、五郎の懐剣等々拝観 箱根ホテルに午食 ホートのかり湖尻に湖上の風光を賞す をしどり水際に情あり 仙石に岡田氏の別業に小憩 此の間秋草の美観寤に趣き深し 強羅に帰る 燈火情趣豊かな頃也 晚餐後七時十二分強羅発にて帰京 清遊忘れ得ぬ印象を残す

十月十九日

秋色図下図にかゝる 川越小島氏来訪 植木³¹¹氏への画のことにて就て 夜武久君研究会の記録持参

十月二十日

秋色図下図 戸田氏作画督促 尚美堂主小茂田君の作品のことにて 小林さん 田中君 来合せ夜食を伴に雑話 半田³¹²君将来のことにて来

十月二十一日

高島房子氏別宅の親類の人にモデルを依頼 そのデッサンをする 秋色図本紙に着手 夜武久君と青樹君略譜を作る 高橋君男子出生(午前六時頃)の快報をもたらす

十月二十二日

モデル房子氏写生 午後弥と蜂須賀家売立拝観 西行 栄花 両作すっかり感心させられる 両作の各々得長ありて森田美代子³¹³修学旅行にて上京 上野附近東京館にたつね銀座浅草

305 内貴清兵衛

306 佐伯永輔

307 根津嘉一郎(1860-1940)実業家。根津美術館の基盤となるコレクションを築く。

308 田中文雄(青坪)

309 植木彦吉 小茂田青樹作品の所蔵者。

310 西郷春子 原富太郎(三溪)の長女。夫は西郷健雄。

311 植木彦吉

312 半田鶴一

上野の夜景案内 大分くたびれる 萩原氏表展切迫 画作督促に来る

十月二十三日

秋色図画作 房子氏モデルの為め来る 三時頃迄写生 弥は朝子 和子をつれて帝劇にブタベストの動物園見物に行く 夜松山、西村³¹⁴、武久君等と雑談 十二時近し 西村君しばらく目の上京

十月二十四日

太田³¹⁵さん青樹遺作展 学校主催の出品画に就て来る 童女座像渡す 房子氏モデルに来て呉れる 三時十五分迄なす 秋色図画作 夕刻森田美代さんより電話 一日かん違ひして居たのであはて、弥と東京館に行き三人にて神保町靖国神社新宿(モナミにて夜食)銀座等の繁華街案内す

十月二十五日

房子氏写生 秋色図多少画作 小林氏画室及新築中の家屋拝見に丁度上京せられし川上³¹⁶氏幸三郎兄と出掛ける 下図画稿 推古の薬師寺三尊の大作を拝見しゆるぎのしない立派な正道をふまれらるゝこと感に不堪 学ぶ可きかなノヽ 帰途駅近き富士屋に夜食す 降雨地をうるをす

十月二十六日

房子氏写生定刻三時二十分迄 中西氏督促に来る 歌舞伎に逍遙³¹⁷博士作曲の会を見物に和楽母 別宅姉 幸三郎兄 弥と出掛ける あいにく雨 十一時近く閉場 雨上り上弦の意外なる大きな月を観る

十月二十七日

房子氏の写生前日同様 鈴木³¹⁸さんの所有なるとか水辺、枇杷、二小禽の拙画の箱書及角谷氏依頼の蛸の箱、亦帰京の有小茂田君の竹雀の箱書等をすませる 高橋君の第一子(始)と命名す 御七夜なればとて 夜清吉黄蜀葵の尺五立幅評を乞ふ 巧みに描かれをつもの也 川上、幸三郎兄等同感

十月二十八日

房子氏写生 川上さん帰沼さる 秋色図画作 近藤さん保険のことにて 安藤氏柘榴謝儀として四百円持参 神崎 齋田氏 武久 小山君等来訪を受く

十月二十九日

秋色図画作 富取君来訪 扇面四季持参 鶴心堂代理に小茂田君作品 鈴木さん所蔵分渡す 弥生は奥多摩に弥は和子と帝劇に朝子は目黒不二にそれノヽ出掛ける 夜松山 武久市川君等来り十時頃まで雑談 松山石川両君泊る

十月三十日

秋色図画作 五時幸三郎兄 小山兄との約にて荻窪駅に会し 山田氏訪問 青樹遺作集のことにて扇面三葉拝借する 帰途新宿に出て中村屋に小憩 帰る

十月三十一日

秋色図画作 三上夫人見へる 雪舟花鳥部分借す 太田 小林両氏青樹遺作返却に来る 夜はデッサン練習に八百屋の娘さんに来てもらふ

十一月一日

軍鶏写生 山村氏個展拝観 本院に公田博士の王陽明拝読 小山君と松坂屋下手物展見物 帰宅 八百屋の娘定時写生 洗心録を中心に弥と談ず

十一月二日

群鶏写生 研究例会

十一月三日

朝鮮より加藤松林³¹⁹氏上京 佐々木³²⁰君と同道来訪 雑談終り夜大館³²¹、広井両君と目黒駅に待合せ銀座に出て浜作にて食事後散歩 コ[口]ンパンに小憩 帰宅 石本君桔梗への青樹氏竹雀箱書取りに来る 渡す

313 森田美代子 森田甚造の娘、御舟は1922年3月に京都の森田家に寄寓している。

314 西村卓三(1908-1955)京都の日本画家。

315 太田耕治

316 川上五郎

317 坪内逍遙(1859-1935)小説家、評論家、劇作家。

318 鈴木新吉 実業家。新画の収集で知られる。

319 加藤松林

320 佐々木京林

321 大館長節

十一月四日

高谷氏画作督促に來れとも次回にしてもらふ、また広瀬氏も同様に為す 秋色図下図 夜平福³²²氏哀悼の意を持ちて同邸焼香に行く 帰宅後水口氏 武久君の訪問にあふ、香料十円

十一月五日

秋色図画作 テッサンの手入れ等 松島画房子展観に就て督促に來る 十二月八日開催の由 子供達は弥 別宅姉と銀座の方へ出掛ける 夜はエヒス、渋谷方面散歩 一家揃ろつてゝある

十一月六日

秋色図着色 午後三時青山齋場に平福百穂氏告別式に焼香 小林 長谷川³²³君と帰途青山喫茶店にて雑談 長谷川氏の滞仏中の所感 画家生活の窮境 画商の倒産等々 夜は八百屋の娘の写生 秋雨風にかはる

十一月七日

秋色図画作 午後春草³²⁴画幅拝観の為高橋鍊逸³²⁵氏邸に同ふ、北原三佳君の紹介を以て同君 小林古徑氏 石本³²⁶君と四名にて三十数点の年代を追ふての敬ふ可き作逐次拝観 夜晚餐は高橋氏の御もてなしにて浜町花長にて 帰途、銀座千足屋に小憩 帰る 不在中黒田 小山 武久 青柳君の来訪

十一月八日

秋色図画作 弥は神奈川に礼に 夕刻飯島氏來る 夜は例のデッサン 武久、市川君來る

十一月九日

秋色図画作 黒田君午頃來る 夕刻大山広光君芝居御不例の為め二十二日に延期とことに画作色紙なりと希望す モウラン³²⁷の夜ひらくを読み始め弥にも聞かせる

十一月十日

秋色図画作 高橋君朝がほ三点持参 評を乞ふ、本格的に進

みつゝある可 弥 朝子と田端に行く 橋本秀二郎氏画作促しに來れとも次回にしてもらふ 八百屋の娘写生八時三十分迄 夜ひらく読む

十一月十一日

軍鶏図下図 松坂屋依頼紙本展の為藤森作画促かしに來る 岡本満津子ミレーの模写持参 夜食後幸三郎兄青樹画集のことにて來る 夜ひらく読む

十一月十二日

朝香宮妃御葬儀を拝す 群鶏図作画に入る 戸田栄次氏 二十三四五展観開催に就て督促に、中村鶴心堂氏 藤岡³²⁸氏 表展出品の作品とりに來る 秋晴図二尺幅渡す 夜武久君と青樹年譜を校正 幸三郎兄も会す

十一月十三日

次次郎君一周忌 青龍寺に法要 午餐の供養を味の素ビル楼上アラスカにて受く 安堵氏大日如来のことにて 森氏紙本展督促 文部省の人独逸の勳章佩用許可のことにて来訪 夜八百屋の娘写生

十一月十四日

南京軍鶏完成す 柿に双雀図下図に着手 高島屋牧野氏作画督促に來たれと次回に延ばしてもらふ、夜八百屋の娘写生

十一月十五日

柿に双雀下図 小林夫人三溪先生茶会に就て 森氏に南京軍鶏渡す 朝子七ツの祝 離れ幸代氏三ツの祝 葵屋主人來り 夜食を共にす

十一月十六日

柿に双雀本紙に着手 研究会例会

十一月十七日

柿果写生 小林さん川面さん弥と三溪先生の御招きの茶会に列席 蓮華院に催うさる 床歌仙切、花ナタ籠に芙蓉の遅花、

322 平福百穂

323 長谷川昇(1886-1973)洋画家。1911年に渡欧、14年帰国後再興日本美術院洋画部に所属。

324 菱田春草(1874-1911)初期日本美術院同人。

325 高橋鍊逸 菱田春草の従兄。

326 石本光太郎

327 ポール・モオラン(1888-1976)フランスの作家、外交官。短編集『夜ひらく』は1922年刊。

328 藤岡光影堂 京都の表具師。

カルカヤツル草 広間の床寂心(道真と同時代の人)の書 三日月の不空けんさくの蓮華(之れに依りて庵を名づく) 聴秋閣の紅葉 金毛窟 西郷氏宅田舎家 風雅亦極れり 西郷氏宅にて晚餐の御もてなし 善一郎³²⁹さんも来られ十時近く御いとまをつける

十一月十八日

柿に双雀図画作 浅見といふ人芳川氏³³⁰の絵画教習について話を聞きに来る 角谷さん螢の箱書とりに来旁々三十日招待の展覧について督促に来る 土曜日なればとて子供達及書生さん達と茶のまねごとをする

十一月十九日

柿に双雀図画作 子供達を連れ弥は自由ヶ丘へ行く 尚美堂主来訪 椿の図尺五渡す 浅見氏原稿持参 校正を乞はる 西島³³¹氏来る

十一月二十日

柿に双雀図画作 中央美術から平福さんの話³³²を聞きに来る 松島、太刀川、桜井画作督促に飯島、も来る 牛田君 小茂田君遺族への画持参 雑談に時を過ぐ 武久、市川、君等も来る 御雪のおふくろ来り泊る 帝展遂に見損ふ

十一月二十一日

柿双雀図画作 午後院に王陽明学を聞く 富取 小山両兄と緑風園にて晚餐を共に前途の気構へに就て話す 弥は前進座見物に出掛けた 大坂清水氏不在中来る

十一月二十二日

柿に双雀完成 戸田に渡す 牛田君作品うたゝね持参 評を乞はる 三溪山所蔵青樹画幅持ち帰る 夜は東劇に豊田君国芳の出世上演 観劇に行く 案外に舞台巧[効]果佳

十一月二十三日

柿に山茶花東京会画帖に着手 京城日報の竹田譲君来訪 座談に時を過ぐ 乗馬の話 西³³³中尉の飛躍は気力理論を理論

として信ずる 偉大なる気力 之れが仲々出来難いのだそうだ いよゝゝ点灸を始める 三里の灸とか案外にこたへる

十一月二十四日

柿に山茶花図完成す 鈴木国太郎氏より玄鶴鑑定に来る 弥生と日吉坂の方へ花を求めよる行く 青樹年譜整理

十一月二十五日

小菊写生 平野庄三郎氏の為替のことにてゑびす郵便局より電話あり 返送の為替八百円なることわかる 小松均³³⁴君来訪 午食を伴に雑談数刻 小山君も会す 夜田中³³⁵ 鈴木大麻、麻古等三君 青樹法要のことにて来る 和楽に行く

十一月二十六日

小菊下図 高橋君子供を連れ[れ]夫婦同道来る 玉川誠二郎君快癒されてくる 武久君絵具のことにて来る 午後美術研究所に展覧の職人尽絵及七絃会を忽那 角田同道出掛ける 村田君に会し共に帰る 不在中戸田謝礼に二百円、持参来る 柿の図に就てゝある

十一月二十七日

小菊図画作 川越ノ青樹君兄 黒田君同道遺品贈呈に就て来る 事情上受けず 疲労あり あんまして床に就く

十一月二十八日

小菊図画作 モデルノことにて小林夫人来る 荻窪にて青樹法要のことあり参列 帰途黒田君のところに立寄り隅谷君持参の粉本 鳥の写生■■■模拝見する 弥は三溪園へ先般茶会の礼に行 本日烈風

十一月二十九日

小菊図完成 孤峯庵主久方目に来訪 夜角谷氏に小菊図渡す 寸法巾一尺九寸立一尺五寸朝鮮紙 平野氏へ再び為替返送す

十一月三十日

牛田君 小山君と約して川和の菊拝観 中山氏のおもてなし

329 原善一郎(1892-1937)原富太郎の長男で実業家。吉田幸三郎、御舟らと親交が厚い。

330 芳川超(1895-1951)美術評論家。『美術春秋』等を編集発行。

331 西島廣造

332 速水御舟「巴里での印象」『中央美術』復興5号(1933年12月)p.42

333 西竹一(1902-1945)男爵、陸軍軍人。ロサンゼルスオリンピック 馬術障害飛越競技の金メダリスト。

334 小松均(1902-1989)帝展で活躍していた日本画家。1934年に院展初入選。1946年日本美術院同人。

335 田中文雄(青坪)

にて午餐を受く 夕刻迄写生して帰途神奈川末広に晩食して
帰る 不在中黒田君来りしと 葵屋主人来る 東神奈川より
タクシー一円 帰途はバス一人三十銭

十二月一日

脚部負傷になやまさる 高橋亨³³⁶氏来訪 研究会モテル写生
は足の痛みにて不参 菊の写生に過ぐ 夜デッサン批評 論
争仲々意義あり

十二月二日

菊ノ写生 弥 三佳君のところへ出掛ける 田中良助氏謝礼
に来る 画帖渡す(秋色図に就て四百円画帖晩秋風物に就て
五十円)夜一家族にて茶会催行
松坂屋より軍鶏図に就て参百円謝礼の送付にあづかる

十二月三日

菊二種下図に着手 尺三巾四尺 幸三郎兄に青樹画集題箋渡
す

十二月四日

菊本紙にかゝる 夜あんまをとる 紅葉死する二ヶ月以前
それを知りつゝ、■■り大辞典をあがなふ 芸術良心の想の強
さを感じる

十二月五日

菊図画作 山中展観に出掛ける考へも足養生の爲め中止 弥
のみ出掛ける 小茂田家三越展観等見て帰る 夜石山太柏氏
来る

十二月六日

菊図画作 弥松坂屋の礼 三十四銀行へとりに行き旁々金泥
を求めに行ってもらふ 藤岡氏より秋晴図に対し(四百円)謝
礼の送付を受く 川越兄 小茂田未亡人連れ立ち明日川越へ
引移りについていとまごひに来る 松本真蔵氏鯉の図譲渡す
るに就て来れども松島画舫の展観選る作画の爲め会はず
朝子発熱三十八度二分 庄司先生の来診を乞ふ

十二月七日

菊図完成 夜松島画舫主に渡す 小林さん来訪 画談に時を
移す 本格的の仕事にたつさわもの少なきをかこつ

十二月八日

昨夜睡眠不足 朝子発熱三十九度四分稍肺炎の気味なり 桐
の味[実]写生 冬空からノヽ鳴る愛す可き音色 庄司先生
の来診を乞ふ 弥看護に努む 夜幸三郎兄来り 唐の巻物の
話あり

十二月九日

氷雨憂愁 芙蓉図下図に着手 二尺巾尺五立鳥子紙に作画の
考 朝子稍快方 心を安んず 夜武久 清吉両君と画談 天
平の霊肉一致の大を讃ふ

十二月十日

芙蓉図画作 角谷氏小菊の謝礼に来る(百五十円) 夜安藤氏
水上氏来訪(シン二図)持参 評を乞ふ

十二月十一日

芙蓉図改作 午後院に公田博士列子の講和を聞く 小山君と
京成上野へ開通の便を利用して市川に富取君を訪問す 都会の
下図の木炭のあとの様な千住附近を越えて
談偶々作画道楽境に及び来春十一日には写生こったもの持合
せる約をする

十二月十二日

芙蓉図画作 尾崎といふ人半切図小禽偽作鑑定に来る 松島
画舫主菊図に対する謝礼に来る(二百五十円) 朝子稍快方
に向ふ 夜作品検へ 当年中に於ける

十二月十三日

芙蓉図画作 青樹年譜作製 葵屋主人翠苔翠芝の屏風のこ
とにて来るが断る 青柳氏柏るり白菊図持参 清吉君扶桑花下
図各批評を乞ふ

十二月十四日

芙蓉図画作 萩原氏画作促しに来る 午後遠入 田中氏等来
る 青樹遺作に就て 折悪しく幸三郎兄風邪 夜和楽にて晩
餐 弥芝居観に出掛け不在 清吉家庭の事情あり帰郷(十円
渡)

十二月十五日

芙蓉図画作 研究例会 午後太田氏北氏の依頼にて小品画作
希望に来る

336 高橋亨(1878-1967)朝鮮学者。

十二月十六日

芙蓉図完成 弥と華族開館に蘭花展見物 北田氏に会す 清水金蔵氏作画依頼に予ての約にて葵屋主人同道来訪 晩食を共にす 豊田君来れども不会 後日を約す 丸山少女之亦作画依頼 鈴木氏玄鶴図箱書依頼に来る 夜石本氏保険のことにて葵屋主人と和楽に病床にある幸三郎兄をたづねる

十二月十七日

第二芙蓉図下図 色彩を主にしてくわたてる 宮田氏絵具持参 求める(六十円) 夜除村氏講話³³⁷を聞きに来る 岩田氏よりみかん 加藤氏よりりんご贈付にあつかる

十二月十八日

第二芙蓉図下図 午後牛田君母堂逝去の為め悔み行く(四日) 同君不在 香料(五円) グランド前東横電を利して帰る 初冬春景趣あり 鶴心堂主小茂田君箱書依頼に来る 院出品枠張代(三十五円)支払ふ 長倉³³⁸氏分古径雅兄と小生の小巻物完成 持参す 弥子供達をつれてスエーター求めに行く 不在中宮田氏に絵具代六十円支払ふ

十二月十九日

芙蓉図本紙に着手 紅を使用して見る 三佳君午後来訪 帯止め、平盆(天女図)のことに西新井薬師の毛彫の拓本の贈呈にあづかる 鐘のことに広尾橋附近の阿弥陀寺のもの鎌倉 同じく円覚寺、建長寺 高麗寺のもの皆同時代 伝法院のは足利等の話あり 風調雨順国泰安民

十二月二十日

芙蓉図画作 夜観月 清吉 越谷両君に督れいを促す 青樹遺作葡萄、秋晴二図箱書ス(鈴木氏蔵)

十二月二十一日

芙蓉図画作傍ら弥生の扇子金地に羽を描く 垣見氏来春三月上旬開催の作品希望に 川越小島新吉氏移転通知のことに 夜除村氏原稿訂正にて来る 金子君に訓かいをあたふ

十二月二十二日

芙蓉図完成 ねずみ和子の扇面に描く 朝顔図下図をつける 小林源太郎氏双松■図に就て院画集を借りに来る 放光堂に

廿円支払ふ 夜忽那さんにげきれいを為す 朝子漸く快宜し

十二月二十三日

皇子降誕祝福国土に満つ 朝顔図本紙着手 小林さんより便あり 明後三溪山へ行くに就て 午後五時偕楽園に院主催祝賀会に列席 銀座散歩 帰宅

十二月二十四日

朝顔(暁に開く花)画作 高橋君菊、秋草二点持参 評を乞ふ 菊傑れり 武久旧夫人来る 夜清吉扶桑花 越谷模本菊評す 朝子久し振りに入浴

十二月二十五日

朝顔画作 昨日の約変更の為小林さんより電話あり 為めに清吉君に三佳さ[ん]の作御届け旁々品川駅に待ち合す小山君に伝へる 亦一方高橋氏依頼の(菊)中山氏への紹介を牛田君に乞ふ事を頼む 山梨勝造氏藤井氏の紹介にて拙作希望にて来る 午後一時桜木町駅に会する三溪山訪問の小林さんとの約にて出際平林氏来る あいにく弥は結髪に出掛け不在 閉口す 為めに十五分遅れる 三溪先生過般来病癒へす病床にあり 周文筆春夏の屏風 応挙(乙卯初春)(殆んど絶筆かといふ)龍の屏風 雪村筆琴こう仙人図 抱一筆うづら及くづの二図 宗達筆みそぎ、光琳筆孔雀白梅裏立葵図 雪舟筆小屏風花鳥、俊賴歌仙古今集 終りに小林さん持参犬の図拝観 雅談に時を送る 川面氏中途より繰合せ来駕致さる 帰宅後 弥土産に更料のそばあり 不在中小山君牛田君の紹介状持参して呉れた外横手君来られし由

十二月二十六日

暁に開く花画作 午後四時頃より一家にて銀座に散歩 三四子供達の求めに応じて買物 富士アイスにて晩食後帰宅 風あり いやに寒い日である 森田さんへ旧作沙魚小品を贈る

十二月二十七日

暁に開く花完成(二尺巾一尺五寸) 気にすまぬ点多し ともか■■■に依頼急なれば此の図を以てあてる 次作今度■■■はと構図をも■■■含意を表はすに努める やはり暁に開く花(二尺巾立一尺五寸) 夜書状整理 松島、中村鶴心堂氏等歳暮

337 速水御舟「絵画の真生命」『美之國』10巻1号(1934年1月)pp.36-37
338 長倉新太郎

十二月二十八日

暁に開く花第二作下図 太田氏に第一作北氏の依頼にあてる
ため渡す 山田直造氏歳暮に来る 羽織紐を受く 横尾君久
方振りに来る 関尚美堂主権の謝礼(四百円)に来る 年賀状
したゝめる いつも乍ら仲々面倒なり

十二月二十九日

暁に開く花下図推考 北田省三蘭を持って来て呉れる 中村
さんより真葛の大花瓶を贈らる 感謝に堪はず 夕刻より銀
座散策 東宮殿下の御命名に当り祝福気分横溢 継宮明仁と
御命名

十二月三十日

暁に開く花下図推考 書齋片付け為に、青柳 仲氏等歳暮に
来る 久方目に夜雨になる

十二月三十一日

暁に開く花画作 現在迄の下図及写生大半整理 焼去す 夕
刻より一家にて銀座に買物旁々散歩 月円らかに中空に冴ゆ